

幼児の遊びにみられる

学びの芽

子どもたちは新たなことに合うたび、
「ワクワク」「ドキドキ」と期待に胸をふくらませ、
「あれ?」「なぜ?」「どうして?」と心を動かし頭脳をめぐらせ、
そして「ふうん」「へえ!」「やっぱり」と感激し、納得します。
このような子どもたちの心や頭脳の動きを受け止め、
感激に共感していくことが
学びの芽をはぐくんでいくのではないのでしょうか。

ベネッセ次世代育成研究所について

設立にあたって

日本では、少子高齢化、核家族化のさらなる進行、女性の社会進出、経済のグローバル化、ITによる情報化など、社会環境の変化が加速し、家族のあり方や親子関係を含めた子どもの育成環境に大きな変化が起こっています。

ベネッセ次世代育成研究所は、多様な価値観やニーズに対応し、個人や家族の生活視点を大切にしながら、子どもや家族が「よく生きる」ための調査研究をしています。

また、子育て世代、これから子どもをはぐくむ世代のそれぞれの視点に立ち、社会文化的・知的・物質的資産を次世代に伝える社会システムをどのように構想するのかといった視点から調査研究、提言をしています。それによって、子ども自身の成長と、子どもを取り巻く地域や世代を超えた関係性が強くなることに貢献することを目指します。

一生を通して人生のそれぞれのライフステージの「よく生きる」を支援し、次の世代、さらにその次の世代が未来に向かって進むべき道標を示すことができると願い、学術的な調査研究と体系的な理念の構築、事業・社会への還元を目指して、ベネッセ次世代育成研究所を設立いたしました。

使命・領域・テーマ

調査・研究の使命

未来を担う子どもをはぐくむためには、子どもの育ちや出産・子育てをあたたく見守る社会を構築することが必要です。当研究所では、子どもの育ちと、男性にも女性にも子育てしやすい環境作りという視点を大切に、調査・研究に取り組んでいます。

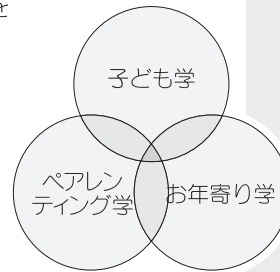
調査・研究の領域

調査・研究の成果を踏まえ、子育て・保育・教育・妊娠・出産・老年学などの分野の諸問題に提言や情報提供を行い、次世代の子どもたちの健やかな成長・発達を支援します。

調査・研究のテーマ

当研究所では、親と子ども、それを取り巻く人たちに焦点をあて、妊娠・出産、育児・保育・教育等について調査・研究に取り組んでいます。

- (1) 妊娠期～幼児期における子どもの成長・発達に関する学際的な研究
- (2) 親子関係・育児に関する基礎研究と実践プログラムの創出
- (3) 子どもを取り巻く社会環境に関する経年調査・長期的研究



発刊に寄せて

無藤 隆 先生 (白梅学園大学教授)

事例から何を読み取るか

1. 事例の活動から学びの可能性を読み取る

活動を計画し、実施する。そこで、子どもの学びはどのようなものとして現れるものなのか。何が可能性としてあるのか。そういったことを本書の事例から読み取ることができます。どの活動にも必ず教師の意図があります。ですが、注意してほしいのは、それはかなり臨機応変に変わるものだということです。予定通りの活動を子どもがするとは限りません。前の日に予定していても、当日思いがけず、別な活動が発展するかもしれません。天候だって変われば、外の活動も違うことになるでしょう。でもだからといって、意図なしで出たとこ勝負でよいとはならないのです。多様な変転の可能性に備え、いくつもの意図を用意しておき、成り行きに応じて、特定の意図の実現を進めていくのです。そこで実現しない意図はまた次の機会を作って可能にしていきます。

2. どの活動にもすべての領域が関わっている

どの活動を取っても、そこにたくさんの気づきの可能性があり、子どもの学びの展開があります。活動は常に総合的で多面的なものです。運動をしようとする、それは領域「健康」だけのことに限らず、「人間関係」も「言葉」も「環境」も「表現」も関係してきます。ですから、領域の保育内容の趣旨をいわば栄養成分のようにとらえてみましょう。実際の活動は料理です。料理は主に炭水化物とか主にタンパク質とかビタミンが豊富とかあるでしょうが、食べておいしく栄養のあるものは、多くの栄養分を多種類含んでいるものです。栄養剤ではなく、子どもに必要なのはおいしい料理なのです。

3. 活動を次の活動へとつなげて発達の道筋を描き出す

活動での学びを分析してみるとたくさんのごとがあります。ですが、それはその活動一つで確実に定着するものではありません。次の活動において確認され、発展していき、学びが発達の道筋として展開していくものなのです。そうやってこそ、本当の意味でも学びとして子どものものになっていきます。ですから、一つの活動を行ったら、そこで成り立ちそうな学びを幾種類も考え、その各々について、次に発展させていくべき活動を想定していくとよいのです。樹木が伸びて、たくさんの枝として広がっていくように、です。

4. 数週間単位で一通りの経験が出来ているかどうかをチェックする

子どもなりの活動を楽しみ、子どもなりの気づきがあり、学びが成り立ちます。そして子どもごとに学びの追求があり、発達の道筋が成立していきます。ですが、時に数週間単位で、保育内容を一通り経験しているかどうかを見てみましょう。あまりに経験が偏っていないかどうか。またそこに停滞していて、行き詰まっているかどうか。毎日満遍なくという必要はありませんが、ある程度の時間幅では経験の多様性を保証していきましょう。

5. 小学校の基盤とは

小学校教育につなげるとは、その前倒しではないことがわかって頂けると幸いです。本書にあるような豊かな活動の中でたくさんの学びをして、それが筋をなしていけば、自ずと小学校の教育の最も大事な基盤が作られるのです。



目次

* * はじめに



本書作成の趣旨・本書の特色	P 5
本書の活用にあたって	P 6～
学びの芽生えがはぐくまれていくためには	P 8～
幼児自身にかかわって	
周囲の環境や人にかかわって	

* * 4歳児の遊びにみられる学びの芽



事例目次	P 10
事例紹介	P 11～

* * 5歳児の遊びにみられる学びの芽



事例目次	P 28
事例紹介	P 29～

(巻末) 幼児の体験と幼稚園教育要領の内容とのつながり






はじめに

磯部 頼子 先生 (ベネッセ次世代育成研究所顧問、元全国国公立幼稚園長会会長)

＊本書作成の趣旨

幼稚園教育の基本は環境を通して行うことであり、その基本に関連して重視することの一つに「遊びを通しての総合的な指導」ということがあげられているのは周知のことです。各幼稚園においては、子どもたちの遊びが楽しく充実したものになるよう工夫し、実践されていることと思います。しかしながら、その努力にもかかわらずなかなかその成果があがらないという悩みや課題も多いと聞きます。このことは「幼稚園は遊んでばかりで何を指導しているのか分からない」「遊んでばかりいて本当に育つか」という外部からの意見、「遊んでいる時の援助の仕方が難しい」「環境の構成が大事なのは分かるが、何をどのようにすればいいのか分からないし、これでいいのかと不安を感じる」などという実践者の言葉からも推測されます。



実際に、幼稚園での子どもたちの遊びを見ると、子どもたちは様々な場で自分たちの遊びを展開し、多くの経験をしています。子どもの遊びは子どもの側からすると遊ぶことそのものが目的ということになりますが、立場を代えてみると成長や発達に必要な重要な体験が多く含まれています。この体験の質を保育者が的確にとらえ、そのことを意識して援助していくことが、経験として子どもたちに積み上げられていくのではないかと考えます。

そのためには、子どもたちの遊びを見る視点をもつことがポイントの一つではないかと考えます。そこで、この事例集では、具体的な場面を通して保育の充実につながる視点を「気づきや経験した事柄」として整理してみました。

＊本書の特色

「ただ遊んでいるだけでは、遊ばせているだけでは教育とはいえない」ということがよく言われます。では、どうあればよいのかということ、実際の子どもの活動の場面を分析することから迫ることにしました。

保育者には常に、子どもたちが何に関心をもっているのか、何に意欲的に取り組んでいるのか、あるいは取り組もうとしているのか、どこに困難を感じたり困ったりしているのかを捉えて、見通しのある適切な援助が求められます。

本書の事例は、実際に保育に従事されている先生方に提供していただいた具体的な保育場面と一緒に分析を試み、子どもたちが体験したであろうことを明らかにしたものです。また、実践に基づいたものなので、保育者の動きや言葉もなぜそのようにしたのか、なぜそうするのかという意図まで明確にすることができました。

ここでは、周囲の日常的な環境、保育者が意図的・計画的に構成した環境、子どもたち自身が創り出した環境、保育者と子どもが協力して創った環境など、様々な環境にかかわって生み出された遊びや活動を掲載しています。したがって、環境を構成する視点や子どもたちの遊びのきっかけ作りにも役立つのではないかと考えます。

さらに、本書では資料として次の二つのことを掲載しています。一つは「学びの芽生え」がはぐくまれていくために大切なこと（P8、9）、もう一つは、幼稚園教育要領第2章に示された幼稚園修了までに育つことが期待される事柄と、いくつかの場面で子どもたちが経験したと思われる事柄との関連の図式化を試みたもの（巻末の図）です。幼児期の成長発達には、体全体を動かして活動することで心身の様々な側面の発達に必要な経験が、相互に関連しあって総合的に促進されていくのがわかります。

巻末の図からも、一つの場面や活動が複数の内容の達成に向かう体験につながっていくことが理解できます。時にはこのような作業を試みるのも子どもの遊びや発達を理解する一助になるのではないのでしょうか。

★本書の活用にあたって

1. 環境の構成や遊びのきっかけ作りの参考に

子どもたちの遊びを充実したものにするためには、心を動かされる環境、時間や場、共に活動したり共感し合ったりできる人の存在などが重要です。また、行動を起こすきっかけや発展させるきっかけも必要です。その手立てを探る資料となります。

2. 子どもの成長発達の理解のために

一人ひとりの発達の実情に応じたきめ細やかな対応が求められていますが、そのためには幼児理解が基盤になります。本書の事例を読み込むことで、その時々の子どもの表情や言動から様々な情報を得ることができます。例えば、自分の気持ちの表現の仕方、それに応答する他の子どもの様子などから相手理解の程度や状況の

判断、さらに興味・関心の傾向など、様々な側面の発達の状況をうかがい知ることができます。

3. 園内での研究・研修の資料として

園内研究・研修を進めるにあたって、具体的な事例での話し合いは有効な方法の一つです。それぞれの園では、具体的な課題をもって研究・研修に励んでいることと思いますが、なかなか自分たちの事例では深く検討しにくい面もあるのではないのでしょうか。自分の園とは無縁の事例を思い切り深く分析してみると、気付くことがたくさんあります。また、職員間で共感したり共通の理解を得られたりする場合も多くあります。さらに、事例をなかなか取りにくい、記録のとり方がわからないなどという場合もあると思います。そのようなときの参考資料として活用できます。

4. 保護者や地域の幼稚園理解のために

保護者のなかには「遊んでばかりでは知的な発達が遅れるのではないか」「幼稚園では文字や数などをなぜ教えてくれないのか」などと、言葉には出さないまでも感じている人が少なからずいると思われます。幼稚園への理解を深め、信頼を得るためには、子どもたちの姿を通して具体的に説明をすることも必要です。本事例では、「気づきや経験した事柄」として、子どもたちの姿から遊びの大切さを説明できる「質」を明確にしていますので、各園での子どもの遊びの質を洗い出す参考になると思います。

5. 幼稚園と小学校の滑らかな接続のための資料として

幼稚園と小学校の関連を考える時、発達の連続性を考慮することの重要性はよく言われることですが、学びの連続性も忘れてはならないことの一つと考えます。また、幼児期の豊かな経験は小学校以降の学びの基盤づくりとして大切なことと考えます。近年、「小1プロブレム」と言われますが、その具体的な姿として「授業中席についてられない、集中できない」「話を聞けない」「集団行動がとれない」「友達と遊べない」「勝手な行動が多く、トラブルが起きると泣きわめいたりパニック状態になる」「注意されても受け入れられない」などがあげられています。これらの状況はなぜ起きるのでしょうか？様々な要因があるでしょうが、その一つに幼児期の経験も大きくかかっているのではないかと考えられます。具体的には、本書の事例にあげたような経験が十分でない、あるいはしてはいても意識的に指導や援助がなされない、幼児に経験として定着されないということがあるのではないのでしょうか。教師が「この場面では何が経験できるのか、あるいは経験したのか」を意識することが指導や援助の際、大切になります。そのことを明確にしながら、子どもたちの遊びの様子を小学校の教師に伝えていくことが幼稚園教育の理解を深めることになり、滑らかな移行につながるものと考えます。

本書の事例からも言えることですが、子どもの学びは知的な面ばかりでなく、多岐にわたっています。幼児期は分化せずに総合的に指導していくことの意味や意義を伝えるのに役立つものと考えます。

遊びを通して育つことが期待できる資質や能力

心情的側面

- ・愛着
- ・人への信頼感
- ・思いやりの気持ち
- ・憧れ
- ・挑戦意欲
- ・自己コントロール
- ・責任感
- ・自己充実感
- ・集中力
- ・達成感、満足感
- ・自信
- ・自尊心
- ・自己有能感
- ・許容力
- ・忍耐力
- ・規範意識

身体的側面

- ・健康な体
- ・持久力
- ・瞬発力
- ・柔軟性
- ・巧緻性
- ・平衡感覚
- ・敏捷性
- ・協応性
- ・リズム感

知的側面

- ・思考力
- ・判断力、決定力
- ・物の認知
- ・理解力
- ・因果関係の理解
- ・試行錯誤
- ・洞察力
- ・予測する力
- ・見通す力
- ・イメージの蓄積
- ・好奇心
- ・創造性の広がり
- ・探究心
- ・表現力

社会的側面（コミュニケーション能力）

- ・言語の獲得
- ・相手とやりとりをする
- ・相手のよさに気付く
- ・相手の思いに気付く
- ・自他の認知
- ・状況の察知
- ・自己を表現する力
- ・人との調整力
- ・（妥協、了解、納得など）
- ・手順やルールの理解
- ・共に生活するためのマナー

技能・能力などの側面

- ・簡単な技能の習得
- ・材料、用具を選択する力
- ・道具の操作
- ・運動能力の高まり
- ・時間や空間の認知
- ・生活習慣の獲得
- ・文字、数への興味
- ・情報の収集と活用
- ・構成力
- ・自己理解

★学びの芽生えがはぐくまれていくためには

魅力ある環境や不思議な現象、事象などとの新鮮な出会い、新たな発見の喜びと驚き、疑問追究のおもしろさや解明の感激、やり遂げた満足感と充実感など、幼児は遊びの中での体験を通して学びの芽をはぐくんでいきます。しかし、出会いがあれば豊かな体験になるかというと、必ずしもそうとは限りません。やはり、幼児自身の諸側面の育ちもかかわりをもちますし、また、周囲の環境や人の存在も大きな影響を及ぼします。この両面がかかわりあって展開される遊びが、その育ちをいっそう促進します。さらに、その積み重ねがその後の体験を豊かなものにしていきます。このサイクルを繰り返すことで、学びの芽をはぐくまれていきます。そのためには次のような子ども自身の育ちや背景があり、そして体験を重ねることでそれらがいっそう豊かに育つようにしていくことが大切です。

<幼児自身にかかわって>

◆他の人との信頼関係が構築されている

- ・保護者の愛情に支えられて、安定した生活を展開できている
- ・人への愛着が形成されている
- ・安心して自分を表すことができる
- ・周囲の環境や人に興味をもち、素直にかかわれる
- ・他の人の考えや意見に素直に耳を傾けられる
- ・自信をもち、自己肯定感が育っている

◆感性が豊かで、自分なりにさまざまな感動体験をしている

- ・身近な環境に興味関心を示し、進んでかかわれる
- ・身近な環境や事象・現象などの変化に気づき、関心をもってかかわれる

- ・些細なものにも心を動かし不思議さを感じるなど、柔軟な感性をもっている
- ・自分からかかわって追究していく面白さを体験している

◆自分の気持ちや思い・考えを素直に表現できる

- ・自分のしたこと、言ったことが受け入れられたうれしさを体験している
- ・友達や他の人の言動に興味関心をもっている
- ・人とかかわりに必要な言葉が育っている
- ・自分の気持ちや考えを相手にわかるように伝えられる
- ・他の人が自分にとって必要な存在、大切な人であるという実感をもっている

◆社会生活に必要な習慣や態度が身につけている

- ・他の人と心地よく生活することの楽しさを経験している
- ・していいことといけないことがわかっている
- ・周囲の状況が判断でき、自分がすべきことをわきまえて行動できる
- ・協力して活動する楽しさと、自他の存在の重要性がわかっている

◆主体的に物事に取り組む意欲や構えが育っている

- ・自分なりのめあてをもって取り組む楽しさや、やり遂げた満足感を体験している
- ・試行錯誤を繰り返しながらも、やり遂げようとする集中力が育っている
- ・自分で考え判断し、決定、行動ができる
- ・失敗と成功を程よく体験している

<周囲の環境や人にかかわって>

右の図は、幼児の遊びと環境との関係について考えたものです。幼児の遊びはまず、幼児自身が自分のやりたいものがあるかどうかにかかっています。幼児は自分の体を駆使して遊びを作り出す名人ではありますが、その際、「もの」があればイメージや動きが豊かに広がり、楽しさは増すと思われます。また、遊ぶ「場」があれば落ち着いて遊びこむことができ、「時間」が保障されていればじっくりと追究することも可能になります。

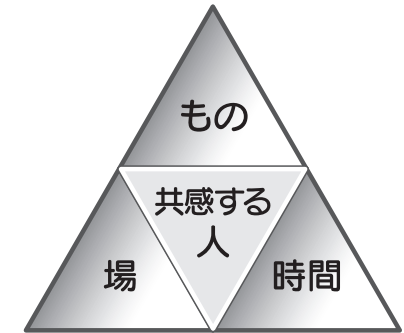
しかし、それだけでは充実感や満足感が十分得られるとは限りません。遊びの場とともに喜んでいたりおもしろがったりする人、共感したり承認・賞賛してくれたりする人など、「人」の存在が大きいかかわっています。ここでは「人」を、子どもと大人として考えています。文中での「大人」は保育者が中心ではありますが、両親をはじめ身近な大人も視野に入れています。以下に主として考えておきたい事柄のみを記述します。

◆魅力的な環境との出会いが期待できる状況が整っている

- ・成長発達に即した教材・用具、その他の環境が用意されている
- ・季節の変化が体感・体験できる自然環境が身近にある
- ・イメージや目当てが実現できる状況が整っている

◆楽しいことを考えたり発見したりする魅力ある友達がいる

- ・魅力的な動きをしたりイメージをもつ友達がいる
- ・新たな目当てとなるモデル的な存在となる友達がいる



◆おもしろさや楽しさを共有・共感するなど、応答してくれる人がいる

- ・偶然のできごと（現象や事象）のおもしろさを共有できる友達や大人がいる
- ・自分が発見したこと、考えたこと、遊んでいることに興味を示す友達がいる
- ・自分の発見や考え、イメージに共感してくれる友達や大人がいる

◆自分のペースで取り組める時間や場が保障されている

- ・一人でも数人でも取り組める場が保障されている
- ・自分たちのペースで遊びを進められる自由度がある

◆学級のなかに、一人ひとりが自分のめあてを追究できる雰囲気がある

- ・学級の仲間関係が育っている
- ・友達の取り組みを温かく見守ったり応援したりする姿勢が育っている
- ・友達の成功や成果とともに喜び合える育ちがある

◆さまざまな取り組みを支え、応援してくれたり、承認・賞賛してくれる大人がいる

- ・取り組みの意味や価値を明確にし、伝えてくれる大人がいる
- ・どこがどのようによかったのかをはっきり伝えた承認・賞賛をしてくれる大人がいる
- ・戸惑いや挫折など、状況を把握した支援や応援をしてくれる大人がいる

5月 事例 1 「ダンゴムシはどこにいるの？」 P 11
 事例 2 「うん、こういう音楽だった（沖縄）」 P 12

6月 事例 3 「やればできる？ゆり組さんみたいに」 P 13
 事例 4 「わかった！地下に水飲み怪獣が・・・」 P 14
 事例 5 「土がぬれている時は水をまかなくてもいいの？」 P 15

7月 事例 6 「できた！先生、見て！」 P 16

9月 事例 7 「ここにはこれを置くといいよね」 P 17
 事例 8 「汽車ひとりて走った！」 P 18

10月 事例 9 「同じもの入れたのにどうして音が違うの？」 P 19
 事例 10 「おしゃれ屋さんですよ いらっしゃい」 P 20

11月 事例 11 「どうしてもう1つの山も越えるのかな？」 P 21

11月3月 事例 12 「どんな花が咲くか楽しみだね」 P 22

12月 事例 13 「階段てさ、こうなるんだよね」 P 23

1月 事例 14 「氷の家？フーって吹けないな・・・」 P 24

2月 事例 15 「こっちの色とこっちの色は違う匂い（ヒヤシンス）」 P 25

3月 事例 16 「赤はあっちにあるよ、さがしてくれば」 P 26

ダンゴムシはどこにいるの？

ムシの特性の理解 情報収集力 自分以外の人の存在

＊年齢：4歳児 ＊場面：幼稚園園庭 ＊時期：5月中旬

事例：1

4歳児のカケルは、年長児がダンゴムシを捕まえては水槽（土や草が入っている）に入れて、触ったり観察したりしているのをうらやましそうに見ています。

担任が気付いて「年長さん、たくさん捕まえているね」と声をかけると、カケルは「うん」と答えますが、目はじっとダンゴムシに注がれています。

担任 「ダンゴムシっておもしろいね」

年長児 「触るとまるまるよ。触りたい？」

担任 「触らせてくれるって。どうする？」

カケル 「触りたい」

触らせてもらい、ダンゴムシがまるくなると水槽に戻しますが、満足した様子は見られません。

担任 「ダンゴムシ、おもしろいね。よかったね」

カケル 「うん。でも、ほくも欲しい」

担任 「どこにいるんだろうね」

年長児 「裏庭の花壇の側の石のところとか、暗いところにいるよ」

担任 「そこを探せばいいのね？探しに行く？」

カケル 「うん！ありがとう」

その後、担任にダンゴムシを入れる容器をもらって裏庭に行き、探し、1匹捕まえると担任に報告に来たり、友達に見せたり一緒に触れたりして、ダンゴムシの変化をおもしろがっていました。

欲しいと言う友達がいると、年長児が教えてくれた通りに教えていました。



気づきや経験した事柄

- ・年長児の活動への気づき
- ・新しい生き物、不思議さ（触るとまるくなる）との出会い

- ・興味の対象への執着

- ・ダンゴムシの特徴の気づき

◆教師の意図

- ・自分の意思で体験してほしい
- ・年長児の気遣いに気付いてほしい

- ・自分のものではない不満

◆教師の意図

- ・年長児への感謝
- ・自分で興味を追究してほしい

- ・新しい情報の入手

- ・興味の追究への意欲
- ・欲求の実現の喜び

- ・おもしろさの共有
- ・知っていることを教える満足感

うん、こういう音楽だった（沖縄）

リズムと音感 経験したことの再現

*年齢：4歳児 *場面：幼稚園保育室 *時期：5月下旬

事例：2

5月下旬、隣接する小学校との合同運動会後のある日、ユウジとタケルは4年生の児童がしていた『沖縄の踊り』をまねて、四角い空き箱（太鼓）をラップの芯（バチ）で叩いていました。

担任 「あっ、小学生の人たちがしていた踊りだね」

ユウジ 「そう。こうやってやるの」（跳ねながら叩いてみせる）

担任 「音楽があるといいね」（CDを探し、沖縄の音楽をかけてみる）

前奏を聴き、「うん、こういう音楽だった」と言って聴いていたユウジとタケルでしたが、曲が進むにつれて、「なんか違うね…」と、乗り気ではなくなりました。

翌日、小学校の先生に本番で使っていたCDを借りてきて曲を流すと、2人は箱の太鼓と芯のバチを持ち、嬉しそうに踊り始めました。



気づきや経験した事柄

- ・見たこと、聴いたことを記憶する力
- ・記憶したことを再現する力
- ・小学生への憧れ
- ・身近にあるものを（自分のイメージの実現のために）見立てる

◆教師の意図……………
イメージを実現してほしい（実現させてあげたい）

- ・音楽の違いを聴き分ける力

◆教師の意図……………
小学生への憧れを大切にしたい

- ・本物に触れる喜び
- ・リズムに乗って身体を動かす心地よさの体験

やればできる？ ゆり組さんみたいに

経験を模倣し、表現する体験

*年齢：4歳児 *場面：幼稚園保育室 *時期：6月

事例：3

6月の誕生会で、年長児たちの演じる『はらぺこあおむし』のペープサートを見た翌日のことです。担任に『はらぺこあおむし』の絵本を読み聞かせてもらっていると、

ユミ 「これ昨日、『ゆり組さん』がやっていたよね」

担任 「そうだね。誕生会で見せてくれたよね」

ユミ 「紙に絵を描いてさ、それを切ってお箸をつけてやればできる？ ゆり組さんみたいにさ」

担任 「そうね。ユミちゃんの好きな絵を描いたらいいね」

ユミ 「それやりたい。私、アイスクリーム描ける」

翌日、担任が画用紙や割り箸を置いておくと、数人の幼児がすぐに青虫や蝶を描き始めました。やがて、青虫が食べたものを描く段になると、「何があったかな？」と言って、棚から絵本を持ってきて、ページをめくりながら、絵本を参考に描き始めました。

絵を描き終わると、それを切り抜き、割り箸をつけて、動かしてみました。観客役の担任が拍手をすると気をよくして、「もう1回したい！」と繰り返し楽しんでいました。通りかかった年長組の担任にも「ウメ組さん素敵！すご〜く上手だね」とほめられて、嬉しさいっぱいの様子でした。



気づきや経験した事柄

- ・観察力と理解力

※興味があるので、よく観察している。
完成品から作る過程（作り方）をイメージし、理解している

◆教師の意図……………
自分たちなりに表現する楽しさ、おもしろさを感じてほしい

- ・必要な情報を得る方法

- ・遊ぶものを自分で作る、自分で作ったもので遊ぶというおもしろさの体験
- ・表現する喜び
- ・ほめられる（評価される）ことの嬉しさ、喜び

わかった！地下に水飲み怪獣が…

役割の交替などへの気付き 砂と水の特性の気付き

*年齢：4歳児 *場面：幼稚園砂場 *時期：6月

事例：4

タカオはアキラと2人で砂場に穴を掘り、水を汲んで来てはその穴に入れますが、水はすぐに吸い込まれ、なくなってしまう。

タカオ「おかしいな～。何ですぐなくなるのかな？」

アキラ「わかった！地下に水飲み怪獣がいるんだよ」

タカオ「えっ、ホント？この下に水飲み怪獣がいるの？
そうか！よーし、じゃあもっと入れようよ。
アキラくん、もっと、お水汲んできて」

アキラばかり何度も水を汲みに行く様子に気が付いた担任が2人に声をかけます。

担任「水飲み怪獣？ おもしろいことに気が付いたね。2人とも楽しそう。でも、水汲みに行くのはアキラくんだけでいいの？アキラくん、疲れていない？」

それを聞いたタカオは、（えっ？）という顔で担任とアキラの顔を交互に見て言いました。

タカオ「ごめん。今度はぼくが行くよ。アキラくん、怪獣が出てこないか、穴を見ていてね」

その後、2人は交替で水を汲みに行きました。



気付きや経験した事柄

- ・水と砂の不思議（特性）の体験
- ・イメージしたことの表現と受け入れ
- ・繰り返し（追究・探究）のおもしろさ

◆教師の意図……………
水汲みは交替してやってほしい

- ・相手の気持ちや状況に気付くきっかけ作り
- ・役割の交替の必要性

- ・相手への配慮の大切さ

土がぬれている時は水をまかなくてもいいの？

植物の生長と水の関係 天候と水の量の理解 土の湿り具合と水の量の関係

*年齢：4歳児 *場面：幼稚園裏庭の畑 *時期：6月

事例：5

4歳児の学級、さくら組は5月末にみんなで畑に枝豆の苗を植え、毎日水をまくことにしました。

次の日から幼児たちは、小さいジョウロにそれぞれ水を入れて畑に行き、「早く大きくなれ」と言いながら水をまいていました。幸いなことに数日間は晴天が続きました。

6月に入り、曇天の日が続くようになり、何日かは雨降りもありました。幼児には雨の日や畑の土が湿っている時は、水をまかなくてもよいということを伝えました。

ハルナは枝豆が気になるのと、毎日水をまくことが日課のようにになっているためか、前日に雨が降り畑の土がしっかり湿っていても、自分の苗に水をまきに行きます。それを見た数人が、一緒に水まきに行きました。

担任は数人なのでよいか？とっていたある日のこと、ハルナが泣きそうになりながら駆けてきました。

ハルナ「先生、あたしの枝豆倒れちゃってる」

担任「本当？一緒に見に行こう」

畑に行くとハルナのものど、周りの何本かが傾いたり倒れたりしています。根腐れを起こしたもようです。

担任「毎日、水をあげてたのにね」

ハルナ「他の人の枝豆は大丈夫なのに、どうして？」

担任は、水やりは植物が育つには大切だけれど、あげ過ぎるとよくないことや天気との関係を考えることの必要性を伝え、新しい苗と一緒に植えました。

その後は、まず畑を見に行って、土を触って湿り具合を確かめてから、水をあげるようになりました。



気付きや経験した事柄

◆教師の意図……………
生長への期待と世話をすることの必要性に気付いてほしい

- ・生長への期待
- ・世話をすることの嬉しさ

◆教師の意図……………
土の湿り具合で水をまかなくてもよいことを理解してほしい

- ・日課としてすることの安心感
- ・自分のものへの愛着

◆教師の意図……………
根腐れしても予備があるので、気付くまで待ちたい

- ・不思議さ
- ・落胆

◆教師の意図……………
腐ってしまったのは残念だが、体験を通して適正な水やりに関心にはよい機会と感じている

- ・新しい知識の獲得
- ・植え直した安心感
- ・わかったことの実践

できた! 先生、見て!

模倣による様々な方法の習得

*年齢: 4歳児 *場面: 幼稚園園庭 *時期: 7月中旬

事例 : 6

4歳児のミノルはシャボン玉の用具が入ったカゴからシャボン玉用の輪を取り出し、シャボン液の入った皿にシャボン玉用の輪を入れて勢いよく振りまわした。しかしシャボン玉はできません。ミノルは不服そうな表情で、「もー! なんてできないんだ! ?」と言いながら、同じことを何度も繰り返していました。

ミノルのすぐ近くでは、ユウジがゆっくりと嬉しそうにシャボン玉を作って飛ばしています。担任はミノルに聞こえるように「ユウジくんのシャボン玉、大きいね〜」と呟きました。ミノルはその呟きを聞いて、ユウジの様子をじっと見つめました。

ユウジの様子をじっと見つめた後、ミノルがシャボン液からそっと輪を持ち上げて動かすと、大きなシャボン玉が出来ました。ミノルは輪から膨らむ大きなシャボン玉に目を輝かせながら、再びゆっくりと輪を動かします。そして、「できた! 先生、見て!」と声を弾ませました。

その後、ミノルは時々ユウジの様子を見ながら、大きなシャボン玉を作ることに夢中になっていました。



気づきや経験した事柄

- ・同じ失敗の繰り返し

◆教師の意図……………
直接、正解を与えるのではなく、自分で成功する方法に気付いてほしい

- ・他者の方法との違いの気づき、他者から学ぼうとする姿勢（他者から学ぶ大切さ）
- ・自分の目当てを実現できる方法の習得
- ・成功（課題解決）の喜び

- ・成功の喜びが、次への発展の動機（原動力）となる

ここにはこれを置くといいよね

型（形）の認識

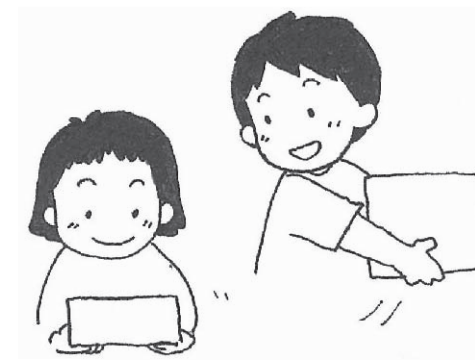
*年齢: 4歳児 *場面: 幼稚園保育室 *時期: 9月上旬

事例 : 7

幼稚園の保育室にある中型箱積み木は、遊んだ後は、壁と床にテープで印をつけた枠の中に片付けるきまりになっています。直方体・立方体・三角柱などの積み木を、うまく片付けると枠内にピッタリと収まるようにしてあります。

毎日片付けていくうちに、子どもたちは大きな積み木は2人で持つなどして、徐々に自分たちだけで片付けられるようになっていきました。やがて、「ここにはこれを置くといいよね」「長四角を持ってきてよ」など、互いに声を掛け合って片付けていきます。

最後の1つの積み木がうまく収まらなかったときには、「これをこう動かして…」と、すでに片付けていた積み木を移動させて組み合わせを直すことまで出来るようになりました。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図……………
同じ形や大きさに気付いて、きちんと片付けてほしい

- ・協力する力
- ・型（形）を組み合わせる力
- ・積み木の特性の理解（等分・等倍）

- ・具体的操作の繰り返しによる理解
- ・自発的な工夫
↓
“学習の基本”として重要

汽車ひとりで走った!

斜度とスピードの関係

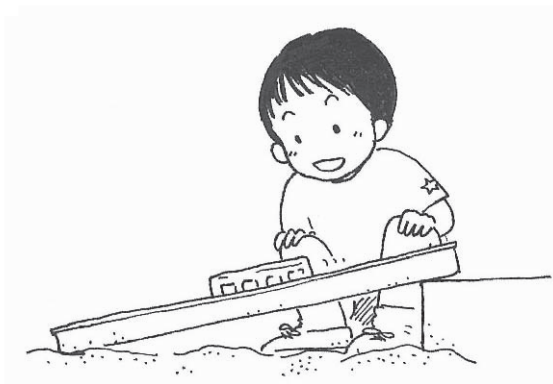
* 年齢：4歳児 * 場面：幼稚園中庭 * 時期：9月中旬

事例：8

4歳児のタカシは園の中庭で、「ピューン、ガタンゴトン」と戸外遊び用の電車を走らせることに夢中です。

タカシの後を追いながら、しばらく同じように電車を動かしていたユウガは、桶を持ってくると、そばに積まれたビールケースの段差を利用して斜めになるように桶をかけました。そして走らせていた汽車を桶の中に入れて手を離してみると、汽車が桶の中を滑り出しました。ユウガは近くにいた担任の方を振り返り、「先生、汽車ひとりで走った!」と歓声をあげました。「本当に走ったね」と言うと、ユウガは嬉しそうに笑いました。

近くにいたタカシもその様子に気が付いて、自分も桶に汽車を入れて滑らせます。勢いよく滑った汽車はビールケースの中に飛び込みました。ユウガとタカシは、汽車をもっと速く走らせたくて、いろいろと桶を動かします。そして、『桶の高さ(斜度)で汽車の滑る速さが変わる』ことをおもしろがりながら、長い時間、繰り返し滑らせて遊んでいました。



気づきや経験した事柄

- ・結果を予測して試す
- ・期待通りの結果と、それが評価される喜び
- ・次の成果に向けた試行錯誤
- ・条件を変えて、繰り返し試すおもしろさ(新たな予測と期待)
- ・斜度と物の動きの関係の気づき

同じもの入れたのにどうして音が違うの?

材質と量の違いと結果 作ったもので遊ぶ楽しさ

* 年齢：4歳児 * 場面：幼稚園保育室 * 時期：10月

事例：9

先週、近くの公園に行って拾ってきたシヤクヌギなどの木の実をみんなで洗って陰干ししておきました。

それらと様々な形や大きさの空き容器、カセットデッキとテープなどを用意してコーナーを作っておきました。

チカ、セナ、チヨノが早速マラカスを作り始めました。木の実を少し入れて振るといい音がします。

チカ 「ねえ、ねえ、聴いて、ほら、いい音でしょ」

チヨノ 「あたしのもいいでしょ」

チカ 「あれ?違う音。何入れたの?」

チヨノ 「ドングリだよ、ほら」

チカ 「ほんとだ!同じもの入れたのにどうして音が違うの?」

セナ 「あたしのも違うよ」

3人で見せ合っていました。ほとんど同時に「あっ!多いのと少ないのだ!」と気づきました。

その後、3人で中に入れる量を変えたり容器を変えたりしていくつも作っては鳴らしてみています。そのうち、みんなのを合わせると音階らしく高低がついてきました。担任が音楽をかけるとそれに合わせて演奏しています。

チヨノ 「ねえ、ねえ、ずっと前に先生たちがやっていたメロディベルみたいだよ」

2人 「ほんとだ!」

セナ 「ねえ、変わりばんこしよう」

しばらくの間、3人は音楽に合わせてメロディベルのつもりになって演奏していました。



気づきや経験した事柄

◆ 教師の意図
自分たちで収集したものを使って遊ぶ楽しさ、自然物と人工物の構成、調合によって変化するおもしろさ、リズムに合わせて演奏する楽しさなどを体験してほしい

- ・環境の変化の気づき
- ・試行錯誤と発見
- ・自分の作ったものへの愛着

- ・違いへの気づき

- ・同じものなのに、という疑問

- ・要因の発見

- ・見通しのある試し

◆ 教師の意図
音楽に合わせて一層楽しくなること、友達と合わせる楽しさも感じてほしい

- ・経験からの想起

- ・気付いたことの実践、新たなおもしろさの体験

事例 : 10

年長児のしている遊び(お店屋さんごっこ)を見てきたミサとマミは、自分たちも「お店屋さん」を始めることにしたようです。積み木でお店(屋台)を作り、担任にクレヨンで「おしゃれや」と書いてもらった紙を看板代わりに貼り付けました。

「後で来てね」と担任を誘うと、紙やテープをお店に持ち込んでアクセサリ作りを始めました。いくつか商品ができると、今度は友だちを相手に呼び込みを始めました。

ミサ「『おしゃれ屋さん』ですよ、いらっしやい」

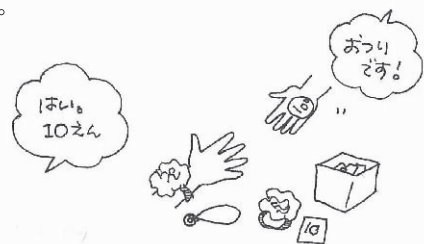
マミ「どれがいいですか?」

ミサ「はい、どうぞ。500円です」

マミ「また来てくださいね」

ミサとマミは丸や四角に切った紙に数字を書いて「お金」にしています。使う数字は、5・10・500・1000など、「1」「5」「0」です。

お客になっている幼児も「お金」を財布に入れたり、出したりしています。支払った代金よりも、お釣りが多かったりしていますが、子どもたちは言葉のやり取りを楽しんでいます。



気づきや経験した事柄

・経験したことの再現

・「店=看板」という認識

◆教師の意図……………
経験した楽しさを自分たちのものとして再現してほしい

・材料を自分たちで選ぶ
(経験を活かす)

・役としての言葉の理解と使用

・お金に使われている数字の認識

・「買い物をすればお釣りが生じる」という経験からの知識
※数の大小(金額の多寡)にはこだわらない

事例 : 11

1学期に武器にして戦うだけになってしまった切り口が「B」の形のブロック(以下ブロックと記述)を一時片付けておきましたが、出すことにしました。子どもたちの登園に合わせて、教師がブロックを長くつなげたのを積み木(立方体の中型積み木2段)に立てかけ、ブロックの溝にビー玉を乗せて転がしていました。登園してきたフミヤが気づき「先生、何してるの?おもしろそう!ほくもやりたい」と早速のってきました。そこで、自分でするようやり方を伝え、他の人にも教えるように言うておきました。すぐに5~6人が遊び始めました。

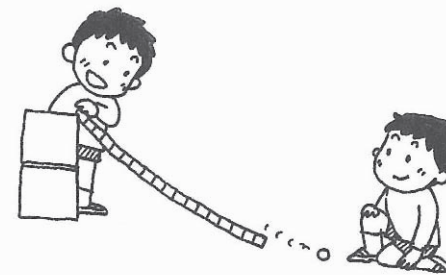
最後に取り組んだツトムはあわててつないだので、何回やっても途中からビー玉が落ちてしまいます。そこで、担任は他の子との違いに自分で気付くようなアドバイスをしました。

そのうち、長くすることに興味が向き始め、ビー玉の転がるスピードが落ちてきたので、間に積み木を1個置いてみました。

フミヤは「先生、そんなことしたらビー玉転がらない」と心配しましたが、転がすように促しました。

やってみると、低いほうの坂を乗り越えて勢いが増していきました。フミヤは「どうしてももう1つの山も越えるのかな?」と不思議そうでしたが、自分がやっても同じ結果だったので、嬉しそうに他の幼児に伝えていました。

それから数日間はこの遊びが続き、積み木を高くしたり何箇所も高低をつけたりして楽しんでいました。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図……………
同じ遊具でもいろいろな楽しみ方、遊び方があることを知ってほしい

・教師の動きのキャッチ
・意思の決定、正確な伝達、受け止め、理解

◆教師の意図……………
・成功しない要因に自分で気付いてほしいことと巧緻性も育ててほしい
・遊びに変化を付けたいこととまた別のおもしろさ、不思議さに出合っほしい

・自分の予測と結果の違い

・不思議な現象との出会いと実験

・予測と実験、結果の確認

どんな花が咲くか楽しみだね

自然体験（植物の生長を観察する）

＊年齢：4歳児 ＊場面：幼稚園園庭 ＊時期：11月～3月

事例：12

いろいろな花の種が入った袋から、幼児一人ひとりがひとつまみずつ種をつまんで、蒔きました。翌日から毎日水をやりながら、1日何回もプランターをのぞきます。

ナツミ「まだ咲かないかな～」

サキ「どんな花が咲くか楽しみだね」

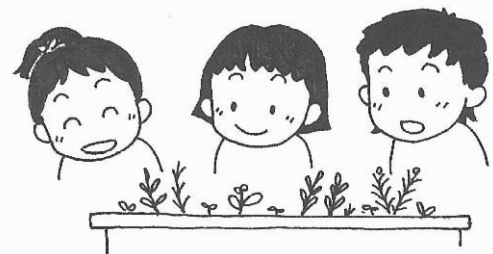
ユウナ「早く出ておいで」

1週間ほどして芽が出始めると、それを見つけたナツミは大喜びでその発見をみんなに知らせていました。やがて、芽が伸びて葉が出てくると、その形や色の違いにも気付いて、とても興味をもったようです。

ユウナ「いろんな葉っぱがあるね」

ナツミ「だっていろんな種を蒔いたもんね」

花が咲き出すと、いくつ咲いているのかを数えてみたり、同じ花でも色が違うものがあることを見つけたりしていました。次はどんな花が咲くのかをとても楽しみにしています。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図……………
いろいろな種子を育てることの期待と楽しみを実感してほしい

- ・植物の生長の楽しみ
- ・自分で種を蒔いた植物への愛着

- ・形や色の比較（違いの気づき）

- ・「原因と結果の関係」の理解
※種子が違うから、咲く花も違う

- ・数を数える
- ・同種と異種での色、形の違い
- ・予想がつかない自然の姿にワクワクする気持ち
- ・自然の変化を楽しみに待つ姿勢

階段てさ、こうなるんだよね

空間を埋める方法の理解

＊年齢：4歳児 ＊場面：幼稚園積み木の部屋 ＊時期：12月中旬

事例：13

アカリ、カスミ、サチヨの3人が中型積み木の直方体6個を重ねた高さの屋根付きの家を作り、クリスマスでサンタクロースがやってくることにしました。3人は担任から大きな白い袋とダンボール箱を載せて固定してある台車をもらい大喜びです。サンタクロースの帽子とヒゲ、トナカイのお面もそれなりに作りました。まず、アカリがサンタクロース、カスミがトナカイ、サチヨが家で寝て待っている人になり、いよいよサンタさんがソリに乗ってやってきました。ところが屋根が高くて上がれません。相談の結果階段があればよいということになり、中型積み木を運んできて並べますが、階段になりません。

カスミが「階段てさ、こうなるんだよね」と1つ置いた次の空間に別の積み木をあてがいます。2人は「そうそう」と言いますが、カスミが手を離して置くと平らになってしまいます。そこへ担任が来て「どの高さになればいいの?」と聞くと、3人は「この高さ」と天井部分を指します。ちょうど直方体4個分の高さです。担任は「じゃあまず、家にくっつけて同じ高さに積んでごらん。そうすれば次はどの高さになればいいか分かると思うよ」と言い、その場を離れて見ていました。3人は、積み木を持ってくると重ねてみます。すると、アカリが「そうか、その次はここまでにすればいいんだ」と言い、あとの2人も「そうだ!」と納得し、積み木を積んでいきました。4段の階段が出来上がり「先生!できた!」と知らせ担任も見に来て「ほんとだ。完成おめでとう!これならサンタさん、屋根に上がれるね」と言うと、笑いながら遊び始めました。



気づきや経験した事柄

- ・積み木を立体に構成する力
- ・必要なものの理解と準備
- ・役割の存在と分担の理解
- ・階段の必要性

◆教師の意図……………
見えない所に存在するものの必要性を理解してほしいが、遊びも楽しんでほしいので、早めにヒントを提示する

- ・実際の体験からの推察

◆教師の意図……………
自分たちで完成できたことの承認と遊びの発展への期待

氷の家？フーって吹けないな…

状況の理解とそれに応じた発想 表現の楽しさ、おもしろさ

*年齢：4歳児 *場面：幼稚園保育室 *時期：1月

事例：14

2月の月上旬に生活発表会があり、その前段階として担任はみんなで「3匹のこぶた」の劇ごっこをすることにしました。

初日は教師がオオカミになり、幼児たちは大・中・小のこぶたになり、オオカミに追いかけるのを楽しんでいました。

翌日になると、オオカミ役をやりたい子が出てきたりこぶたでなくて別の動物になりたいと申し出る子がいて、好きな役になることにしました。

リュウ、ワタル、ヤスユキが「ぼくたちはペンギンで、氷の家をつくりたい」と言い始めました。

担任 「氷の家、おもしろいね。でも、オオカミさんどうするかしらね。聞いてみる？」

3人 「ぼくたち氷の家にするけどいい？」

オオカミ役 「えっ！氷の家？フーって吹けないな…」

ワタル 「お湯で溶かしちゃうっていうのは？」

オオカミ役 「うん！それならいい！」

その後、3匹のこぶたの家に加えて、次のような提案があり、この劇遊びは「3匹のこぶた」ではなく「オオカミとどうぶつたち」という題名になりました。最後は3番目のこぶたのレンガの家に全員が逃げ込んで終わりです。

ニワトリ＝金網→ひもを引っ掛けて引き倒す

リス＝木の上→木を揺すって倒す

クマ＝洞穴→煙で燻す



気づきや経験した事柄

◆教師の意図………

「劇」として教師から提示するのではなく、まず遊びとして何かの役になって動くおもしろさを感じてほしい

・自分のやりたい役の意識

◆教師の意図………

・自分たちのやりたいことを中心に独自の話にしていきたい
・課題は自分たちで解決してほしい

・相手の意向を聞く

・状況をイメージする

・提案と了解

・イメージを実現する楽しさの共有

・それぞれの家とそれを壊す方法との因果関係の理解

こっちの色とこっちの色は違う匂い(ヒヤシンス)

水でも植物が育つ不思議さ 種類の違いの気づき 視覚と臭覚からの気づき

*年齢：4歳児 *場面：幼稚園保育室 *時期：2月

事例：15

4歳児こりす組では10月にピンク、ブルー、白のヒヤシンスの水栽培をしました。担任と一緒に時々交代で水を取り替えながら根の伸びの変化に驚いたり喜んだり、また、水で栽培することに不思議さを感じたりしていました。

2月に入るとそれぞれつぼみがだいぶ伸びたので担任が窓辺の日当たりのよい台に載せておきました。ある日、登園してきたアサミが「あれ！なんだかいい匂いがする」と鼻をくくんくさせています。後からきたユメコが「アサミちゃん、何しているの？」と言い、「いい匂いがするの」「ほんとだ！」と2人で探し回ります。

アサミ 「あーこれだ！白いヒヤシンスが咲いたんだ」

ユメコ 「ほんとだ！きれい！」

アサミ 「ピンクも咲き始めたよ」

ユメコ 「ブルーもだよ」



2人 「先生、ヒヤシンスが咲いたよ！いい匂い」

担任 「本当？どこ？」

アサミ 「ね！いい匂いするでしょ」

担任 「ほんと！他の人にも教えてあげるといいね」

その後2人は、次々登園してくる友達に伝えながら「こっちの色とこっちの色は違う匂い」「あたし、ピンクの匂いの方が好き」「あたしは白かな？ブルーもいいけど」などと言いながら花の香りを楽しんでいました。

気づきや経験した事柄

◆教師の意図………

幼児一人ひとりがじっくりと観察し自分なりの気づきや発見をしてほしい

・水で育つと言う教師の話の確認と不思議さと生命力の実感

◆教師の意図………

ヒヤシンスは咲くといい香りがするので誰かに気付いてほしい

・友達の動きへの気づき

・匂いのもとを探り当てた嬉しさ、発見の喜び
・共感

・感動を伝える

◆教師の意図………

気付いたことを他の幼児にも伝えてほしい

・香りの違いの気づき
・自分の好み(思い)の主張

赤はあっちにあるよ、さがしてくれば

自分の気持ちの調整、情報提供

*年齢：4歳児 *場面：幼稚園園庭 *時期：3月

事例：16

マサヤとリュウは園庭でヒーローの基地（乗り物）を作りながら、互いに自分の作っているものを教え合っています。

マサヤ「ムゲンバインだから、ここが角で強いんだ」

リュウ「デカレッドはここが翼でさ…」

しばらくして、マサヤが、ふと顔をあげると、リュウが赤い三角ブロックを運んできて、自分の乗り物につけようとしていました。

マサヤ「それ、ぼくが使おうとしていたんだ。返して」

リュウ（怒って）「ぼくが見つけたんだよ！」

マサヤ「ぼくだってほしかったのに。これじゃ、強くなれないよ」

担任「マサヤ君。それはリュウ君のだよ。こっちにまだいろいろな色があるよ」

マサヤ「いやだ。絶対に赤がいい」

リュウ「赤はあっちにあるよ、探してくれば」

担任「マサヤ君。リュウ君が教えてくれたよ。あっちに行ってみようよ」

マサヤ「…うん。じゃあ」

担任と一緒に赤いブロックを探してきたマサヤは、それを思い描いた場所に置き、満足してリュウに声をかけます。

マサヤ「リュウくん、出発するよ。
乗ってもいいよ」



気づきや経験した事柄

- ・自分のイメージを表現する

- ・自分の欲求の主張

◆教師の意図……………
その日、その場での優先権の確保と譲歩

- ・自分の権利が保障された安ど感

◆教師の意図……………
問題解決のための情報の提供

- ・自ら行動することで課題を解決できたという体験

- ・願いが実現した喜び
(気持ちの安定)

5歳児の事例 目次

4月	事例 1 「おたまじゃくしは何を食べるのかな」…………… P 29
	事例 2 「ヒナノちゃんありがとう」…………… P 30
5月	事例 3 「そっちから風が吹いてくるから転がってくれないよ」…………… P 31
	事例 4 「うん、ぼく、虫が好きだもん！」…………… P 32
	事例 5 「ヤゴのえさは、オタマジャクシ!？」…………… P 33
	事例 6 「お母さん、白いお花好きでしょ」…………… P 34
	事例 7 「そうだ、切ればいいんだよ」…………… P 35
	事例 8 「この間はぼくの手ぐらいたったのに」…………… P 36
6月	事例 9 「あ、黄色いテントウムシ発見！」…………… P 37
	事例 10 「明日はイングランドの旗で応援してもらおうの」…………… P 38
	事例 11 「虫のことなら何でも知ってるよ！」…………… P 39
	事例 12 「年長だからひとり20回にしようよ」…………… P 40
	事例 13 「今の『なし』ね、もう一回ね」…………… P 41
	事例 14 「今日はハルちゃんの誕生日にしよう」…………… P 42
	事例 15 「ぼくにも見せて」…………… P 43
	事例 16 「エー、ぼくチャンピオンだったのにな…」…………… P 44
	事例 17 「もっと高くするのはどう？」…………… P 45
	事例 18 「こっちが高い」「こっちが深い」…………… P 46
	事例 19 「学校の勉強したみたい」…………… P 47
7月	事例 20 「穴をあけて、これ入れるから」…………… P 48
	事例 21 「たんけんごっこしようよ」「じゃあ、この地図…」…………… P 49
	事例 22 「ぼくの作った砂時計は何分が教えて」…………… P 50
	事例 23 「そうさ、ヘラクレスオオカブトだよ」…………… P 51
	事例 24 「不思議!だんだん染み込んでいく」…………… P 52
	事例 25 「洗濯機から出したら軽くなってた」…………… P 53
	事例 26 「すごい!水車が回った!」…………… P 54
9月	事例 27 「これ、日本の旗と模様は同じでも色が違う」…………… P 55
	事例 28 「『お茶熱いですから気をつけて』っていうのはどう？」…………… P 56
	事例 29 「…じゃあ誰のハンカチなの」…………… P 57
10月	事例 30 「先生、ミサト、なわとび上手になったよ」…………… P 58
	事例 31 「この位で遊んだほうがいいよ。間に合わなくなるもん」…………… P 59
	事例 32 「あれ!真っ黒。どうして？」…………… P 60
	事例 33 「アキちゃんは速いからアキちゃんはどう？」…………… P 61
	事例 34 「先生と一緒に跳べるんだけどな」…………… P 62
11月	事例 35 「そうか!もしかしてお風呂の時とおんなじ？」…………… P 63
	事例 36 「綱引きをしたいけど」…………… P 64
	事例 37 「人間の分けっこだね。算数の勉強みたい」…………… P 65
12月	事例 38 「1つ残ったから最後は6個にしよう」…………… P 66
	事例 39 「歌いながら鳴らしたら気持ちがそろろかな？」…………… P 67
	事例 40 「やっとなんて来たんじゃない」…………… P 68
2月	事例 41 「お母さんザリガニと同じ形だ!」…………… P 69
	事例 42 「今の上手だったよ」…………… P 70
	事例 43 「どっちも凍らない。なんで？」…………… P 71

4月

おたまじゃくしは何を食べるのかな

自然体験 情報収集

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園の池・保育室 ★時期：4月中旬

事例 : 1

5歳児のモトキは、園庭の隅の池でおたまじゃくし捕りに夢中です。捕ってきたおたまじゃくしを容器に入れて、大切に保育室まで持ち帰ってきました。モトキは中をのぞき、「1, 2, 3…」と数を数え、友だちのチヒロに数を知らせています。

モトキは「先生、おたまじゃくしは何を食べるのかな。ぼく、飼いたいな」と言います。担任は「何を食べるんだろうね。この本に載っているかな」と図鑑を示します。

チヒロとモトキは図鑑を広げて夢中で知りたい情報を探し始めました。該当ページを見つけたチヒロは絵を見て、「かつおぶしとパンだって」と大声を上げ、そばにいたモトキは「ご・は・ん・つ・ぶ、ごはんつぶだ〜」と担任に伝えています。

チヒロ「今あげるものがないよ」

担任 「みんなの今日のお弁当は何？」

モトキ「あ!おにぎりのごはんがある」

お昼のお弁当の時間になったらあげることにしました。



気づきや経験した事柄

- ・生物への愛着
- ・物と数の対応

◆教師の意図……………
情報を調べる方法（図鑑など）へ誘導したい

- ・情報の活用
- ・文字から内容を理解する
- ・情報を言葉で伝える
- ・「分かること」の喜び

◆教師の意図……………
視野を広げたい

- ・助言の意味の理解
- ・自分たちと同じものを食べる
- ・生物への愛着
- ・感動の共感

ヒナノちゃんありがとう

コミュニケーション（言葉と行動の思いやり）

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園保育室 *時期：4月下旬

事例：2

お弁当の後、ヒナノはコウキのイスの下にごはん粒が落ちていたのに気が付きました。

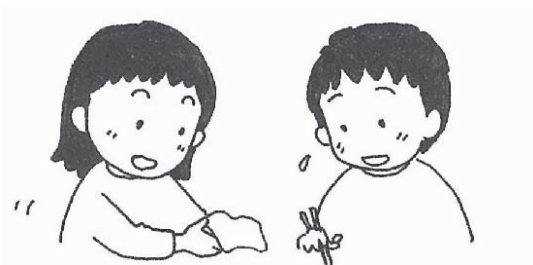
ヒナノの様子に気が付いた担任は、ヒナノに「コウキちゃんに教えてあげてね」と言うと、ヒナノはイスの下を指差しながら、コウキに「ごはん粒が落ちていたよ」と知らせました。

コウキはどうしたらいいのか分からない様子で首をかきあげています。すると、ヒナノは自分のポケットからティッシュを1枚取り出すと、コウキに手渡しました。コウキはそのティッシュを受け取ると、自分でごはん粒を拾いました。

担任 「コウキくん、教えてもらってよかったね」

コウキ 「うん、ヒナノちゃん、ありがとう」

ヒナノは少し照れくさそうに笑いました。



気づきや経験した事柄

- ・友達の状態に気付く

◆教師の意図……………
気付いたことを行動に移してほしい
(道徳的实践力)

- ・やさしさや親切を行動にする
- ・相手への思いやり
- ・相手の状態の理解
- ・具体的なサポートの工夫

◆教師の意図……………
自分にとって他の人の存在の必要性に
気付いてほしい

- ・感謝される喜びの実感

そっちから風が吹いてくるから転がってくれないよ

自然現象の体験（風や雲の観察）

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園園庭 *時期：5月

事例：3

風がとても強い日。園庭にいた子どもたちは、自分が強風に押されて動かされることに「きゃあー」と声をあげて大喜びです。砂場用のバケツが風で転がっていくのを「きゃあーきゃあー」言いながら楽しそうに追いかけます。

担任は固い紙を筒状に丸めて転がしてみせました。風に押されてころころ転がっていくその動きに興味をもった子どもたちは、自分たちも作りたいと言い、好きな色を選んで作り、転がし始めました。

何度も転がして遊んでいるうちに、子どもたちは自分で気が付いたいろいろなことをそれぞれに言い始めました。

コウキ 「そっちに転がしたいけど、そっちから風が吹いているからそっちに転がってくれないよ」

カオル 「風って力持ちなんだね」

ユウキ（空を見上げ） 「わあ、雲がすごく速く動いている」

クミ 「雲に乗って天まで行きたいな〜」

カオル 「あっちのほうに雲が流れているね」

コウキ 「こっちから風が吹いているからじゃない」



気づきや経験した事柄

- ・日常生活の中での、自然現象を体感する

◆教師の意図……………
・風の方向や強さなどを感じ取ってほしい
・自分たちで作って楽しむなど活動を広げてほしい

- ・体験の楽しさと道具作りの工夫

- ・体験を通じた気づき

- ・風に方向があることを知る

- ・風力の実感
- ・雲の動きの変化への気づき
- ・自然（雲の速さ）に感動

- ・風の強さ、方向と物の動きとの関係の推測と理解

うん、ぼく、虫が好きだもん!

昆虫の観察 (図鑑の活用)

*年齢: 5歳児 *場面: 幼稚園保育室 *時期: 5月

事例 : 4

幼稚園の畑で虫探しをしていた5人の男児が、テントウムシを捕まえて保育室に戻ってきました。テントウムシを飼育ケースに入れると、モトキは図鑑を取り出してとても熱心に見ていましたが、しばらくすると…

モトキ「先生、このテントウムシ、カメノコテントウって言うんだよ」

担任 「どうして分かったの?」

モトキ「ほら、黒くて赤の形で描いてあるでしょ」

担任が飼育ケースをのぞき込むと、テントウムシは確かに黒地に赤い模様でした。モトキは図鑑に載っているたくさんの種類のテントウムシの中から、同じ模様をしたテントウムシを指差しました。

担任 「本当だ。カメノコテントウだ。モトキくん、すごいね」

モトキ「うん。ぼく、虫が好きだもん!」

モトキは嬉しそうな顔をして、少し得意げでした。

気づきや経験した事柄

- ・詳しく知る方法の獲得
- ・図鑑と実物の比較
- ・個々の昆虫の特徴の把握と判断

◆教師の意図……………
子ども自身で(自発的に)調べた行為への承認

- ・自分で調べて分かった喜び

ヤゴのえさは、オタマジャクシ!?

生命の大切さへの気づき 自然界の輪廻

*年齢: 5歳児 *場面: 幼稚園保育室 (学級全体での活動の場) *時期: 5月

事例 : 5

イツキとリョウは幼稚園の池でヤゴを捕まえ、飼うために図鑑でヤゴのエサを調べました。ヤゴがオタマジャクシを食べることを知ったリョウは、保育室で飼っているオタマジャクシの水槽のところにやってきて、水槽の中にヤゴを入れようとしてしました。すると、オタマジャクシを捕まえたヒロハルに「オタマジャクシがかわいそう」と反対され、リョウは考え込んでしまいました。

担任はこの問題を学級で話し合うことにしました。

「オタマジャクシが食べられちゃうのはかわいそう」

「でも、ヤゴがトンボになるのを見たい」

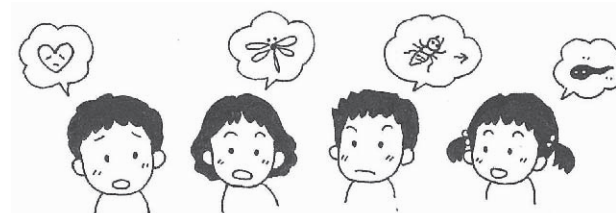
「ヤゴはお池に放してあげたほうがいい」

「オタマジャクシを半分だけあげればいい」

一人ひとりが一番いい方法を探して、話し合いが続きます。

〈結論〉

ヤゴがトンボになるところは見られないが、池に放すことにしました。



気づきや経験した事柄

- ・知らないことを調べる方法 (図鑑の活用など)
- ・学習方法の習得
- ・(自分とは違う) 他人の意見があることを理解する

- ・生命の大切さ
- ・思いを実現するための試行錯誤

◆教師の意図……………
・お互いの思いや考えを出し合う中で、相手の気持ちを知り、友だちと一緒に試行錯誤してほしい
・しかし、保育室においてもいつトンボになるかわからないというヒントも提示する

お母さん、白いお花好きでしょ

大切な人への感謝の気持ち

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園・家庭 *時期：5月上旬

事例：6

明後日は母の日です。幼稚園で、母のためのプレゼントを作ることになり、キョウスケは担任が実現可能なものとしていくつかあげた中から、お花のアレンジメントを選びました。はさみとかごを持って裏庭に行き、切ってもよいと言われている花壇の花を何種類か切ると、担任が用意したオアシス入りの容器に差し始めました。白いノースポールとピンクのゼラニウムを中心にみやこわすれを3本ほどあしらったものが出来上がりました。担任にラッピングしてもらいながら「素敵！お母さん喜ぶよ」と言われ、嬉しそうでした。

降園時、作品を紙袋に入れ大事そうに持って保育室から出て行くと、迎えに来た母親に「それなあに？」と言われますが「ないしょ」と言っていました。

(以下は母親からの情報)

父親も帰宅し、家族で夕食を始めようとした時、キョウスケが「おかあさん、いつもありがとう」と言ってアレンジメントを差し出しました。母は「まあ素敵！ありがとう。さっきのいしょこれだったの？」と嬉しそうです。

父親 「ほう！素敵な色合いだね」

キョウスケ 「うん、お母さん、白いお花好きでしょ」

母親 「そうなの。どうして分かったの？」

キョウスケ 「ずっと前、そう言ってたもん」

父親 「よく覚えていたな。お父さん知らなかったよ」

その日の夕食は会話がはずみ、いつもにも増して和やかなものになりました。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図……………
一律に同じものでなく、一人ひとりが自分の母親のことを考えて、相手の喜ぶものをプレゼントしてほしい

- ・母の好きなものが分かる
- ・母への感謝の気持ち、愛情
- ・思うようにできた満足感
- ・色彩感覚、自然の素材の取り入れ
- ・賞賛の喜び

- ・母が喜ぶことへの期待
- ・ワクワクする気持ち

- ・母への感謝の気持ち
- ・母の気持ち
→嬉しさと我が子の成長の喜び

- ・有能感
- ・母親の好みの理解、役立ち感

- ・経験の記憶と必要に応じた想起
- ・父の存在
→子の姿の認め、賞賛

- ・温かい家族、存在感

そうだ、切ればいいんだよ

課題解決の工夫

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園保育室 *時期：5月上旬

事例：7

子どもたちは園内で栽培するイチゴを毎日観察し、赤くなるのをとても楽しみにしていました。ある日、10粒ほどが赤くなっていましたので、お弁当の時間にデザートとしてみんなで食べることにしましたが、残念ながらイチゴの数が人数分ありません。

担任 「困ったわね。全員の分、イチゴがないわ」

ダイキ 「…う～ん、そうだ！切ればいいんだよ。」
(イチゴの大きさを見比べて、指を差しながら)
「これは大きいから5等分でしょ。こっちは3等分、小さいのはこのままでいいよね」

担任 「5等分とか3等分とか、難しい言葉を知っているのね。どういうこと？」

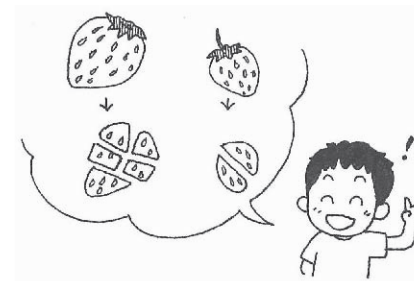
ダイキ 「これはね、大きいから5つに分けると一番小さいのと同じになるし、これは3つに分ければいいかなと思うの」

担任 「なるほど、みんなどう？ダイキくんが言ったことわかったかな？どうする？」

園児たち 「うん。それがいいよ」

全部のイチゴを一律に半分に切る(2等分する)のではなく、その大きさによって等分する数を変える方法に、子どもたちは納得したようです。それぞれ何等分するか考えながら切ると、ほとんど同じ大きさになりました。

ほんの一口ですが、みんなで分け合って食べたイチゴの味は格別においしいものでした。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図……………
順番にするなり切るなり、自分たちで決めてほしい

- ・大きさの差異に関する気づき
- ・課題(数の不足をどうするか、大きさの差異をどうするか)を解決するための思考や工夫



- ・等分に分ける必要性
- ・等分になる予測と確認

- ・納得と安心感、満足感

この間はぼくの手ぐらいだったのに

自然体験 植物の生長への驚き 栽培物とのかかわり

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園園庭 *時期：5月下旬～6月上旬

事例：8

学級で野菜の苗や種を植え、水やりは順番にすることにしました。ある日、水やりをしようとしたヒロシは、芽が出てきていたとうもろこしを見て、驚いた様子で担任に話しかけました。

ヒロシ「うわー、とうもろこしがでっかい！」

担任「本当だね。いつの間にか大きくなったね」

ヒロシ「すごい！すごい！」

担任「ヒロシ君の手ぐらいの大きさかな？」

(ヒロシは自分の手のひらと比較しながら)

ヒロシ「うん。ぼくの手よりちょっと大きいくらい」

その後、適度に雨も降り、とうもろこしはどんどん生長していきました。しばらくしてまた、ヒロシの水やりの当番がまわってきました。ヒロシは水をやりながら、

ヒロシ「えっ！？先生、これってとうもろこし？」

担任「そうだよ。また大きくなっているね」

ヒロシ「この間はぼくの手ぐらいだったのに…」

担任「今日はどのぐらいの大きさになっている？」

(ヒロシはとうもろこしと背比べをしながら、自分の足の付け根を指差し)

ヒロシ「う～ん、今日はこのくらい」

その後も、ヒロシは水をやるたびに、とうもろこしと背比べをするようになりました。

気づきや経験した事柄

- ・身近な植物の生長への気づき、驚き、実感
- ※自然への興味や関心の発端

◆教師の意図……………
具体的な長さや大きさを比較することで、植物の成長速度への興味がより膨らんでほしい

- ・自分の身体をモノサシにして測り、長さを実感する
- ・経験との比較（経験の活用）

- ・植物の生長への期待、興味

あ、黄色いテントウムシ発見！

生物の成長過程の実体験

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園保育室 *時期：6月

事例：9

幼児たちは畑からテントウムシの幼虫をたくさん捕ってきて、飼育ケースで育てています。ある日、ケースをのぞき込んでいたカイトが大声をあげました。

カイト「あっ！黄色いテントウムシ、発見！」

タカヤ「本当だ。カイトくんが捕ってきたの？」

カイト「ううん、違うよ。誰が入れたんだろう？」

担任「ほんとだね。幼虫がたくさんついていたはずなのにね」

数日後、飼育ケースの中がニジュウヤホシテントウでいっぱいになっていました。

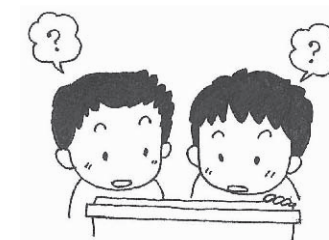
カイト（不思議そうに）「え～っ、誰が捕ってきたの？」

モトキ「どうしてニジュウヤがいるのかな～？」

カイト「…あっ！分かった。幼虫がニジュウヤになったんだよ。（飼育ケースの中でサナギになっている、下半分が黄色の幼虫を見つけると）ほら、これがもうすぐ黄色テントウになるんじゃない？」

モトキ「そうか！そうだね！」

カイトは広げた図鑑のニジュウヤホシテントウのページをのぞき込みながら、ニジュウヤテントウの幼虫から成長の過程（幼虫→さなぎ→黄色いテントウムシ→成虫）を指差しながら見えています。担任が「幼虫が黄色いテントウムシになって、それがニジュウヤになったんだね」と言うと、カイトは嬉しそうにうなずいていました。



気づきや経験した事柄

- ・生物の変化に気付く観察力
- ・自分で変化に気付いた喜び
- ・分からないことや疑問を解明したい欲求

- ・観察の結果と経験からの予測
- ・観察する力

- ・経験に基づいた洞察力

- ・調べて知ろうとする知的好奇心
- ・疑問を解決した喜び
- ・予測が合っていたことの喜び

明日はイングランドの旗で応援してもらおうの

国際理解 (外国への興味)

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園園庭 ★時期：6月

事例：10

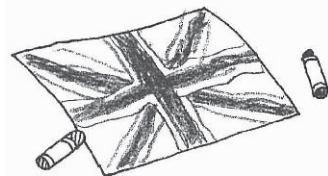
最近幼児の中でもサッカーへの興味が高まって、「日本が勝った」など、試合の結果が話題になります。

園庭でサッカーをするときも、「イングランドになりたい人、フランスになりたい人…」と聞いて、チームに分かれて遊んでいます。この日はイタリアとブラジルのチームになっての対戦です。

徐々に点数にも興味をもつようになり、そばで見ている担任に「今、1対2でイタリアが勝っているよ」と伝えます。そこで担任は点数がわかるようにダンボールで得点版を作りました。

ボールを手で触ると「ハンド」、「イエローカード」という声も聞かれます。足でのボール運びも上手くなってきて、1つのボールをみんなで楽しそうに追いかけています。まだサッカーに参加できない3~4歳児は「フレー、フレー」と声を出しての応援です。

昼食後、シュンスケは、「イングランドの旗を描きたい」と言だし、担任が世界の国旗が載った図鑑を渡すと、イングランドの旗を描き始めました。担任が理由を聞くと、「明日は(自分が描いた)イングランドの旗を振って応援してもらおうの」と言いました。他の幼児も興味をもち、それぞれ自分の応援したい国の旗を描き始めました。



気づきや経験した事柄

- ・マスコミや周囲の人々の状況や情報のキャッチと、そのことへの興味関心
- ・国名の理解の広がり

- ・状況の把握と報告

◆教師の意図

- ・遊びを通して勝敗や数字への興味をもってほしい
- ・外国への関心も広めたい

- ・遊びへの外国語の取り入れ
- ・遊びを通した運動機能(ボールを足で扱う)、身体能力の向上
- ・みんなでボールを追いかける楽しさ

- ・外国の国旗への興味

◆教師の意図

- ・遊び(サッカーや国旗作り)を通して、諸外国に親しみを感じてほしい

虫のことなら何でも知ってるよ!

虫ごとの特性の違いの理解

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園園庭・テラス ★時期：6月

事例：11

ノゾミとソウタはシャベルを持って、木の根元やその周りに穴を掘っています。2人はいろいろなところを歩き回りながら、虫を探しているようです。2人の持っている容器の中は、捕まえた虫たちでいっぱいです。

ノゾミ「これはワラジムシ?」

ソウタ「そう。ダンゴムシはまんまるだもん」

様子を見ていた担任が近づいて、

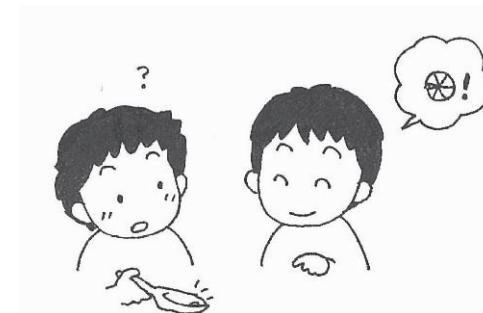
担任「ねえ、ソウタくん。このダンゴムシは背中に黄色い模様があるけど、こっちのダンゴムシには模様がないよね。どうしてなのかな?」

ソウタ「ぼく、虫のことなら何でも知ってるよ。黒いのがオス、黄色い(模様がある)のはメスだよ」

担任は本棚から『ダンゴムシ』の本を持ってきて確認します。

担任「本当だね、ソウタくん。こっちがオスで、こっちがメスって書いてあるよ」

担任の感心した顔を見て、ソウタはとても嬉しそうな表情です。ノゾミや周囲の幼児たちが「本当だね」と言いながら、本を見始めました。ノゾミは「これはダンゴムシの赤ちゃん…」と言いながら、本とダンゴムシの実物を見比べています。



気づきや経験した事柄

- ・自分で探して手に入れる喜び

- ・虫ごとの特性の違いの理解

◆教師の意図

- ・自分自身で調べ、発見するという楽しさを体験してほしい

- ・知っていることを伝える誇らしさ

◆教師の意図

- ・確認したり(図鑑の活用の仕方)、承認したりすることにより、他の幼児にも正しく伝わってほしい

- ・観察(経験)と比較

年長だからひとり20回にしようよ

ルールを守る必要性和大切さ

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園遊戯室 *時期：6月

事例：12

レミとノゾミが担任と一緒にトランポリンを出してきました。すると、4～5名の幼児が集まってきて、自分たちも入れてほしいと言います。ノゾミはその子どもたちに、「こっちに並んで」と言うと、自分はトランポリンに上がって跳びはじめ、待っている子がいることを忘れたように何回も跳び続けます。

レミが「ノンちゃん、代わってよー」と頼んでも、ノゾミは止めずに跳び続けます。そばで見ていた担任が「ノゾミちゃん、レミちゃんの言ったこと聞こえた？」と問うと、ノゾミはようやく跳ぶのを止めました。

担任 「どうやって交代するか、みんなで相談したらどう？」

リナコ 「ノゾミちゃんは、10回だったよ」

ユウガ 「年長だから、ひとり20回にしようよ」

レミ 「そうね、それがいいね」

そして全員で、「1, 2, 3・・・」と数えながら、トランポリンで遊び始めました。



気づきや経験した事柄

- ・集団での譲り合いの気持ち
- ・ルールを決めてそれを守る
- ・自分中心に進めたい気持ち

- ・交代の必要性和欲求

◆教師の意図……………
集団生活での譲り合いの気持ち、ルールを決めてそれを守ることの重要性に気づき、それを友だちと守りながら取り組んでほしい

- ・ルールの必要性の認識
- ・判断するための事実確認
- ・自分の判断、意見や考えを伝える
- ・年長に成長している誇り

- ・数のカウントの活用
- ・1対1の対応

今の『なし』ね、もう一回ね

フェアであることの大切さ

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園園庭 *時期：6月

事例：13

園庭で、ミナミとリナコの2人が、なわとびを片手に向き合って、遊びのルールを決めています。

ミナミ 「3回戦だからね。リナコちゃんからだよ。
私が数えるから、跳んで」

リナコがなわとびを始めると、

ミナミ 「1、2、3、4、…9！リナちゃん、9回。今度は私が跳ぶよ」

リナコ 「1、2、3、4、…21！」

ミナミ 「ミナミの勝ちだね。じゃあ、次は2回戦ね。
今度はミナミから跳ぶよ」

リナコ 「1、2、3、4、…7！」

ミナミは7回で足を引っ掛けてしまいました。

ミナミ 「今の『なし』ね。もう1回ね」

跳び直そうとするミナミに向かって担任が、

担任 「ミナミちゃん、残念だったね」

ミナミ 「…うん。はい、リナちゃん、跳んでいいよ。
1, 2, 3…27！2回戦はリナちゃんの勝ちね。
3回戦やろうよ」

2人はなわとびを続けました。



気づきや経験した事柄

- ・遊びを通した「ルール」の理解

- ・動きと数の対応
- ・跳んだ回数の比較（多・少）

- ・フェアとアンフェアの違い

◆教師の意図……………
自分にとって好ましくない（不利な）状況になっても、決めた約束・ルールを守り、それを受け入れるセルフコントロール力を身に付けてほしい

今日はハルちゃんの誕生日にしよう

イメージーション（空想力） 自然物の活用

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園園庭 *時期：6月

事例：14

ハルカ、サカエ、アオイの3人が、園庭ですり鉢やまな板を使って遊び始めようとしていました。担任が「ここに通りに草やお花があるから取りに行こうよ」と誘って、ヨモギ、アサツキ、ヒメジオン、マリーゴールド、ペゴニアなど、遊びに使える草花を教えました。

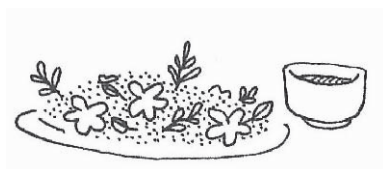
しばらくするとハルカが「お花のケーキができたよ。見に来て！」と担任を呼びに来たので行ってみると、容器に砂・花・葉を飾ってケーキを作り、すり鉢を使って色水を作っていました。

色水作りをしているハルカは、そばできれいな色水を作ったサカエにその方法を尋ね、「水を少しだけにするといいよ」と聞くと、すぐにそのように作り始めました。アオイは木蓮の実を拾ってきて、「これ、包丁で切れるかな？」と言いながら切り始めています。

サカエ「ねえ、今日はハルちゃんの誕生日にしよう！」

アオイ「あっ、じゃあ、誕生日パーティーだね」

サカエの提案で、料理作りがまだまだ続きます。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図

日常の遊びの中で、少しでも自然と触れる機会をもっとほしい

- ・自然の草花への興味関心
- ・いろいろな自然の素材の特徴を学ぶ

- ・遊びに活かす楽しみ

- ・素材を工夫するおもしろさ

- ・知らない方法への興味の追究

- ・遊びの中でのイメージの広がり
- ・ヒントをくれた友だちへの感謝
- ・友達のヒントを生かすおもしろさ

ぼくにも見せて

困難にも挑戦する姿勢

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園保育室 *時期：6月上旬

事例：15

年長組では「折り紙のお店屋さんごっこ」が人気です。幼児たちが自分で折った折り紙を品物の代わりにしてお店さんを開くのです。折り紙の得意な幼児は、みんながあまり知らない折り方のものを次々と折って、自分のお店に並べています。

あまり折り紙が得意ではないヒロハルは、絵本コーナーで「折り紙の本」を広げて、何かいいものはないか探していますが、なかなか折りたいものが見つかりません。

担任 「この『恐竜』はどう？」

ヒロハル「（折り方が）難しくてよく分からないよ」

ヒロハルはしばらく折り紙の本をパラパラとめくって考えていましたが、結局、自分が作りなれている『飛行機』を折ることに決めて、折り始めました。

担任はヒロハルの隣に座ると、「クワガタ」や『バツタ』など、まだ比較的やさしいもののページを広げて、ゆっくりと折り紙を始めました。すると、それを見ていたヒロハルは、「ぼくにも見せて」と言って、本をのぞき込みながら、新しい折り方に挑戦し始めました。



気づきや経験した事柄

- ・必要な知識を手に入れる方法（図鑑・手引書などの活用）

- ・自分の能力の判断と回避

- ・無意識の妥協の習慣

◆教師の意図

- ・難しいことを避けるのではなく挑戦してほしい
- ・強制ではなく、自分からかかわってほしい

- ・図を見ながら折るという経験
- ・教師をモデルとした自分の挑戦

エー、ぼくチャンピオンだったのにな…

自他の存在の認識 自尊と他尊 チームで競い合うことへの理解

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園遊戯室（学級全体での活動） ★時期：6月中旬

事例：16

学級全体でジャンケンカード取りゲームをすることにしました。赤と青チームに別れ、一人ひとりがそれぞれ自分のチームカラーのカードを5枚ずつ持って向かい合って並びます。ルールは相手チームの人とドンをしてジャンケンをし、勝ったら相手のカードをもらうという単純なもので、持っていたチームカラーのカードが無くなったらチーム用の箱から持って行って何回も時間まで参加できるというものです。合図があってゲームが始まると夢中で動いています。

チカラ「ぼく、もうなくなっちゃった」

ツヨシ「もう、5枚取ったよ」

時間になってそれぞれ陣地に戻り、勝ち取った枚数を数えます。担任は「0の人」「1枚の人」と順に個人の成果を聞いていきます。今回は10枚獲得したツヨシがチャンピオンです。

担任「今日は今までと違ってみんなの分を集めて、赤と青とどっちが多いか比べてみますよ」

中央にカードを対応させて並べていきます。チャンピオンだったツヨシの赤チームが2枚足りません。

ツヨシ「エー！ぼくチャンピオンだったのになあ」

チカラ「ぼく、2枚しか取れなかったけど勝った」

担任は個人の努力が大切なことはもちろんだが、1人の力だけではチームはだめなこと、チームのメンバーがいることが自分の利益につながるなど、個と集団の関係が分かるように話しました。幼児たちは「よし！今度は…」と意欲的です。何回か繰り返し、この日はトータルで引き分けでした。

$$3 + 1 + 0 + 7 + 5 = 16$$



気づきや経験した事柄

・ルールの理解と確認

◆教師の意図……………
繰り返しやってほしい幼児が早く負けてしまうので、休まずに繰り返せる方法にする

・数の確認（物との対応）

・自分の成果の確認

◆教師の意図……………
・個と集団の関係、チームワークに気付いてほしい
・チームのメンバー一人ひとりが大切な存在であること、協働ということに気付いてほしい

・1対1対応の経験

・チームで活動することへの理解

・連帯感と意欲

もっと高くするのはどう？

斜面の角度とスピードの関係性

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園遊戯室 ★時期：6月中旬

事例：17

ヒサシ、タケシ、フミヤの3人は大型積み木と板積み木を使って斜面を作り、自分たちで作った車を走らせていました。ところが、スピードが落ちてくると、板と板のつなぎ目をつかえて止まってしまう。次に上から力を入れて、勢いをつけて走らせると途中から落下してしまいます。様々に試していましたが、

ヒサシ「そうだ、もっと高くするのはどう？」

タケシ「急な坂にするってこと？」

フミヤ「そうか、急にすればスピードアップだ」

そこで、3人は積み木を1段増やしてみると、少しスピードが出てつなぎ目は通過するようになりました。すると、斜面をもっと長くしたくなり、板積み木をつなげますが、今度は途中で止まってしまう。さらに積み木を足して高くすると、急な坂になりすぎてストーンと落ちるだけで走りません。

担任は「さっきは成功したのにおかしいね」と言いながら板積み木と床の接点（角度）はどうかということに気付くような助言をした後、途中で支柱を立てると斜度が緩やかになることや、平坦な部分があってまた緩い坂があるとどうなるかなど、試すポイントを提案しました。その後、いろいろ試行錯誤を繰り返していましたが、2段式の斜面を成功させました。

翌日は短時間で作り上げました。後ろから登らせる道や落ちやすい場所に側壁を作り、さらに、回遊できるように工夫し、繰り返し楽しんでいました。



気づきや経験した事柄

・積み木で斜面を構成する力

・なぜ止まってしまうのかの推理
・高低の比較
・高さとの関係の理解
・高いとスピードアップの仮説

・仮説の実証
・更なる期待と意欲
・科学的思考、科学的アプローチの芽生え
・期待の挫折

◆教師の意図……………
折角始めた遊びを充実させたい、このメンバーでは新たな発想は無理だがヒントがあればできるだろうという期待。加えて緩急の視点も知らせたい。

・共同、協力の必要性和成功の喜びの共感
・経験を生かす
・連続する動きのおもしろさ

「こっちが高い」「こっちが深い」

同じ基準を使って測る

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園砂場 *時期：6月下旬

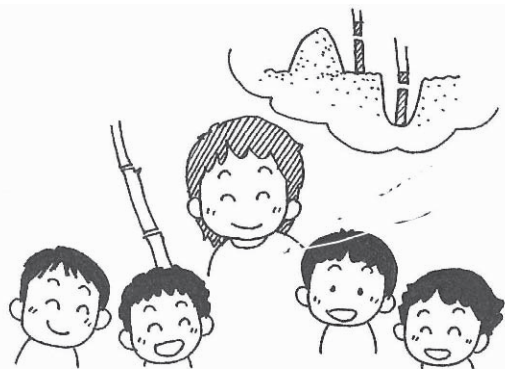
事例：18

砂場で山作りをしているイサオとタカシの2人は、山の高さを自分たちの体と比べながら、「膝まで来た」「膝より高くなった」と言いながら、夢中になって山を高くしていきます。その近くでエイジとイチロウは自分たちの掘った穴に手や足を入れては深さを測り、「もっともっと深くして、先生を驚かそう」と言いながら穴を掘り進めています。

そのうち互いに「自分たちの作った山の方が高い」「自分たちの掘った穴のほうが深い」と言い合いを始めました。周囲にいた子どもたちも、この「比べっこ」に参加し、それぞれ自分の体を使って比べては、その感想を言い合います。

子どもたちは担任に状況を説明し、何とか決着をつけたいと訴えます。担任が「どちらも一生懸命にがんばったのだから、（白黒をつけなくても）いいのでは？」と言っても納得しません。

そこで担任は竹の竿を持ってきて、「測る」ということを子どもたちに提案します。その結果、山の高さや穴の深さが同じであることが分かり、4人は大満足。周りの子どもたちも大喜びでした。



気づきや経験した事柄

- ・自分の体を使って、「高さ」や「深さ」を測る体験

- ・質の違うものを比較することの難しさ

◆教師の意図……………
課題を解決する方法の提示

- ・同じ基準を使って、客観的に「測る」という方法を知る
- ・お互いを認め合う心地よさ

学校の勉強したみたい

コミュニケーション（言葉と行動の思いやり） 物の数え方

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園園庭 *時期：6月下旬

事例：19

4歳児の1月末に種芋を植えたジャガイモを掘りました。大小様々なジャガイモがたくさん掘れました。

担任は、○を10ずつ10列書いておいた模造紙を庭に置き、幼児たちにジャガイモをその○に1個ずつ置いていくように伝えました。いっぱいになると別の紙を出すようにしました。

担任は「ずいぶん並んだね。数えてみましょうね」と言い、「もうみんなは年長さんだからいつもみたいに1、2…って数えないよ。ちょっと難しいけど大丈夫かな」と確認し注意が向くようにしました。そして、1列が10個であることを確認し、10、20…と10のかたまりで数えていきました。幼児たちは「すごい、100だ」と感激し、1枚に10個の列が10あり、それで100個であることを理解していきました。100個が3枚と10個の列が6列、そして残りの4個を数え、合わせて364個採れたことが分かり、大感激をしました。

サナエが「先生、1、2、3…って数えると300は大変だけどこうやって数えると早いしおもしろかった」と言い、他の幼児も「学校の勉強したみたい」「足し算って知ってるよ」などと口々に言っていました。

その後、数は364個だけど大きいのが小さいのがあるし、いろいろな形があるので一緒に数えるのはおかしいと言う幼児も出てきて、2～3日はジャガイモをいろいろに分類したり数えたりしました。ジャガイモは全園児で分けて持ち帰ったり園でカレーを作って食べたりして、収穫の楽しさを満喫しました。



気づきや経験した事柄

- ・収穫の楽しさ

◆教師の意図……………
収穫物が多いことと数の数え方にもいろいろあること、数の集合などにも関心をもってほしい

- ・「ちょっと難しい」ことへの興味
- ・数のかたまり（集合）との出会い
- ・数の単位の理解

- ・数の集合の理解

- ・固体の質の違いの気づき
- ・同数＝同等ではないという気づきや疑問

- ・収穫の喜び、充実感

穴をあけて、これ入れるから

自分の考えの実現

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園園庭 *時期：7月

事例：20

水遊びが盛んになってきたので担任はテラスに、太さの違う透明のホース・ペットボトル・じょうご・大小のカップなどを用意しました。

水遊びの大好きなマサタカはそれを見つけると太さの違う透明のホースをつなげ、ホースの先にじょうごをつけました。そこから水を流し、ホースの中を流れる水の様子をじっと見ては、それを繰り返しています。

しばらくすると、マサタカは担任のところにペットボトルを持ってやってきました。

マサタカ「穴を開けて。これ（ホース）を入れるから」
担任 「どこに開ければいいの」

マサタカ（ペットボトルの下の方を指差して）「ここ」

マサタカは穴を開けた部分にホースを差し込み、水を入れます。ペットボトルに入れた水がホースを伝わって流れてくる動きを何度も繰り返し、その水の動きをじっと見ています。そして、ペットボトルを持ち上げては、水の流れをじっと見て楽しんでいます。

マサタカはこれらのことを繰り返しながら、水の特性（「水は高いところから低いところへ流れる」）に気が付いたようでした。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図……………
子どもの好きなこと（興味・関心）に合わせ、教材を使って水の性質（水の流れ・動き）など、様々なことに気付いてほしい

- ・水の流れの観察
- ・水の流れの不思議さやおもしろさの気づき

- ・観察からの新しいイメージの広がり
- ・知的好奇心の育ち

- ・自分の想像したイメージの確かめ（実験するおもしろさ）

- ・水の特性の体験的な理解

「たんけんごっこしようよ」「じゃあ、この地図…」

想像力を駆使する楽しさの体験

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園保育室・園庭 *時期：7月

事例：21

担任は本の表紙に描かれてある探険地図の拡大コピーを子どもたちに見せながら、童話「たんたのたんけん」の読み聞かせをしていました。ある日、「たんたのたんけん」を読んでいた2人の幼児が、壁に張ってある探険地図の拡大コピーを見ながら話をしていました。

アユミ「探険ごっこしようよ」

モモカ「うん。じゃあ、この地図見ながらしよう」

2人は本と地図を見ながら、大型の積み木を並べて、

アユミ「ここは『たんた』の家にしようよ」

モモカ「うん。じゃあ、ジャングルはどこ？」

アユミ「えっとね〜」

今度はペンと紙を持ち出し、地図を描き始めました。

アユミ「ここが『たんた』の家でしょ。で、お菓子屋さんがあるのがこっちだから…」

モモカ「ジャングルは緑でいっぱいだから外がいいよ」

2人は園内を歩きまわりながら、あちらこちらを絵本に出てくる場所に見立てながら、自分たちの地図を描いていきました。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図……………
音声情報（読み聞かせ）だけではなく、視覚情報（探険地図）も提供する。遊びを豊かにしてほしい。

- ・環境の取り入れと、自分たちのイメージを共有

- ・おもしろかった物語を再現したい欲求（疑似体験）
- ・聞いたり、読んだりして得たイメージの実現

- ・平面図に表されたものを、立体的に再現しようとする力

- ・園内を物語の場所に想定する
- ・地図というもの（その果たす役割）への興味関心

ぼくの作った砂時計は何分か教えて

時間の概念の理解

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園 *時期：7月

事例：22

ミキヤが嬉しそうに、ペットボトルを2つ組み合わせて中に砂を入れたものを持って担任に見せにきました。

ミキヤ「先生、これ砂時計だよ」

担任「本当だ。大きな砂時計だね。やって見せて」

ペットボトルの砂が落ちる様子を一緒に見た後、担任は実物の砂時計を持って来て逆さまにしました。

担任「これは3分間を計る砂時計なのよ」

ミキヤ（じっと見ながら）「…3分ってすごく長いね」

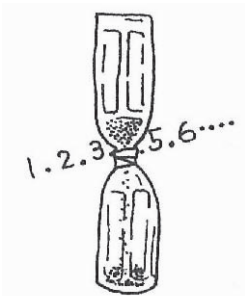
担任「そうだね。3分って思ったより長いね」

ミキヤ「そうだ、ぼくの作った砂時計は何分か教えて」

担任「いいよ。1、2、3…7、8。8秒だよ」

ミキヤ「そっか！これは8秒の砂時計なんだ」

ミキヤは嬉しそうにペットボトルの砂時計を友だちに見せにいき、「これは8秒の砂時計だよ」と伝えながら、やってみせました。ところが、ミキヤが「1、2、3…6」と数えたところで、砂時計の砂が落ちきってしまいました。ミキヤは「あれ？もう少し速く数えるのかな…」と言いながら、もう一度、繰り返し始めました。



気づきや経験した事柄

- ・目当て通りに工作を完成させた喜び
- ・過去に見た記憶を再現する力（イメージする力）

◆教師の意図

実物の砂時計を観察することで、その機能や特性を理解してほしい。時間についても興味をもってほしい

- ・時間の長さの実感
- ・数（量）と時間の長さの関係
- ※時間を計るには、数を数えればよいことに気付く
- ・砂の落ちる速さと、数える速さとの関係性への気づき
- ※過去の経験（記憶されたイメージ）が、再度実物に出会うことで確かな知識として定着する

そうさ、ヘラクレスオオカブトだよ

想像力・工夫する力

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園保育室 *時期：7月

事例：23

『ムシキング』の大好きなタイチが、「いいこと考えた！」と言って製作コーナーにやってきました。空のペットボトルとストローを取り出してきて、コーナーのテーブルの上で、はさみで切ってテープでつけ始めました。

担任「もしかして、ムシキングの？」

タイチ「そうさ、ヘラクレスオオカブトだよ」

ところが、材料のストローを使いきってしまいます。

タイチ「もっとストローが欲しい」

担任「ストローはもうないの。ストローの代わりに、何か他のものでできない？」

タイチはしばらく考えていましたが、「そうだ！これを使おう」と言って、牛乳パックを細く切り、足や角などのパーツを作っていました。



気づきや経験した事柄

- ・自分の頭の中のイメージを、形に表現したいという欲求（好奇心）
- ・自分のイメージを理解されたことによる「有能感」「自信」

◆教師の意図

- ・与えるのではなく、自分で工夫してほしい
- ・他の教材の活用も広げたい

- ・イメージの実現に向けた、材料の工夫

不思議！ だんだん染み込んでいく

色水が浸透していく不思議さ 同じ模様が数ヶ所できる不思議さとおもしろさ

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園 *時期：7月上旬

事例：24

子どもたち数人が色のよく出る紙（通称ハタガミ）で色水を作っていました。担任は四角に切った障子紙を持ってきて、角がたくさんできるように小さく折り、そのうちの一角を色水に浸します。すぐに取り出しては次々に別の角を別の違う色に浸していきます。それをじっと見ていた幼児たちは「先生、何しているの？」「何になるの？」「いろいろな色になっちゃうの？」などそれぞれに言っています。黙ってじっと見ていたマサミは、

マサミ「先生、変だよ。だって、先生は先っぽの方しか付けていないのにだんだん上の方まで染みてくるよ」

担任「本当だ。よく気が付いたね。不思議ね」

他の幼児もじっと見ては「ほんとだ」と実感しています。全体に色が付くと担任は「そっと広げてみるね。どんなふうになっているかな」と言いながら広げます。様々な色が微妙に混ざり合い、きれいな色合いの染め紙が出来上がっていました。「わあ、きれい」「やってみたい」と興味を示します。担任はポイントだけ注意してすぐに始められるようにします。

マサミ「私がしてもやっぱり段々上にくるよ」

サクラ「私も。どの色も、だよ」

出来上がるとそっと広げ「えーっ！不思議。思ったのと違う」「色が混ざってきれい！」「こんなので洋服つくりたい」「虹色だよ」「あれっ！ここここ同じだ」「ほんとだ！同じところが4つもあるよ」など思ったことを言い合い、「今度はどうするのができるかな」と期待しながら何回も試していました。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図

- ・新しい活動の提示と毛細管現象など科学的な現象に出合い不思議さを感じてほしい
- ・偶然できる色合いのきれいさ、染め紙の特性などに気付いてほしい

- ・教師の動きに対する興味関心

- ・観察力
- ・不思議な現象への気づき

- ・他の幼児の気づきの確認

◆教師の意図

興味・関心の高まりへの期待

- ・自分でもやりたいという欲求

- ・不思議な現象の確認
- ・担任と同じ体験の確認

- ・担任と同じ現象に対する安心感
- ・推測（予測）とは違う驚き
- ・きれいさ、不思議さの体験
- ・同じ模様がいくつもできる発見

洗濯機から出したら軽くなってた

物の重量の変化（水分の関係）

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園保育室・シャワー室 *時期：7月中旬

事例：25

夏休み前の大掃除の時のこと、ミホはままごとコーナーのエプロンやスカートを1枚1枚もみ洗いしてバケツの中に入れていきます。それから脱水するためにバケツを持って、洗濯機まで一生懸命に運びました。思った以上に重いバケツに、小さな体が左右にふらつきます。担任に操作してもらい、脱水が終わった後、再び洗濯物をバケツに入れて持ち上げると、今度はあまりの軽さに驚いた様子でした。

ミホは洗濯物を干しながら、担任に話しかけます。

ミホ「これ、とっても重かったのに、洗濯機から出したら、すごく軽くなってたよ」

担任「へーえ、そうなんだ。どこか違ってた？」

ミホ「ううん。同じものだよ」

担任「でも、ほら、もう絞っても水がでないよ」

ミホ「ホントだ。濡れてない。湿っているだけだ」

ミホは衣服が濡れているときと脱水した後の重さの違いに、不思議さを感じているようでした。



気づきや経験した事柄

- ・布の状態の変化
- ・物の軽重の実感
- ・不思議さを感じる感性

◆教師の意図

変化とその理由に気付いてほしい

- ・変化の理由を考える
- ・濡れた物⇒乾燥、の気づき

すごい！ 水車が回った！

動力としての水の動き

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園テラス ★時期：7月中旬

事例：26

担任はペットボトルや牛乳パック、道具などを集めると、ペットボトルの底を切り取り、ふたに穴を開けてビニール管を通し、そのビニール管を別のペットボトルにつなげていきます。ペットボトルの底を上にして、高い木の枝にぶら下げ、段々に低くしていきます。数人の幼児が担任の行動の意図がよく分からないながらも、ワクワクしながら集まってきて見えています。担任はポイントのところで言葉に出してやり方やコツをつぶやきます。最後に牛乳パックに切り込みを入れて水車を作り、それを一番低いペットボトルから出ている管の下に置きました。

担任「さあ、成功するかな。水がどう流れるかよく見ていてね。」

担任が最初の（1番上にある）ペットボトルに水を入れると、水は順々にペットボトルの管を通って最後に水車の羽に当たり、水車が回り始めました。

幼児「先生、すごい！水車が回った！」

担任「よし！成功。みんなもやってみる？」

幼児「やりたい！」

1人がペットボトルに水を入れると担任の時と同じように水車が回りました。「やったー！成功！」幼児たちは大喜びです。その後は、みんなで何回も水車を回して楽しみました。

気づきや経験した事柄

◆教師の意図

- ・ 新たなおもしろさに出合っしてほしい
- ・ 水の勢いなどにも気付いてほしい

- ・ カッター、目打ちなどの道具の使い方の習得
- ・ 教師の行動への興味
- ・ 仕掛けのおもしろさ

◆教師の意図

- ・ 新しい活動では成功してほしい
- ・ おもしろさを十分体験してほしい

- ・ 水の流れのおもしろさ、不思議さ
- ・ 細い流れでも水車が回る驚き

- ・ 教師への尊敬と憧れ
- ・ 教師の温かい言葉、愛情の実感

- ・ 教師と同じことができる喜び
- ・ 成功の喜び
- ・ 友だちとの共通の喜び、一体感

これ、日本の旗と模様は同じでも色が違う

国際理解 世界の国への興味と関心

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園保育室 ★時期：9月

事例：27

リョウ、タケシ、ヒサシの3人は、国ごとに国旗と国名、そして世界のどこにあるのかを記した絵本を広げて、頭をくっ付けるようにして見えています。

リョウ「これ、日本の旗と模様は同じでも、色が違う」

タケシ「バングラディッシュ、って書いてあるね」

ヒサシ「これはケイレブ君（カナダ人のお友だち）の国の旗だね」

ヒサシ「この国はどこにあるのかな？」

リョウ（地図の1箇所を指差して）「ほら、ここだよ」

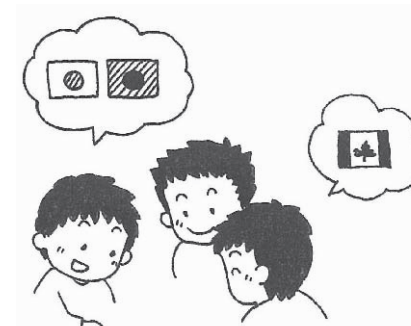
外国への興味が深まってきた3人は、さらに世界地図の本を持ってきて、ページをめくり始めました。地図に書かれている文字や、絵で紹介されているその国の文化・自然・産物などに関して、気が付いたことを互いに伝え合っています。

ヒサシ「アフリカには、ライオンやゾウがいるんだよ」

リョウ「氷で作った家がある。寒くないのかなー」

タケシ「スペインには、踊っている人がいるよ」

3人は夢中になって世界地図の本をめくります。



気づきや経験した事柄

- ・ 国旗のデザイン（色や模様）をきっかけに国旗に親しむ

- ・ 共通点と相違点の確認
- ・ カタカナの読み

- ・ 探す楽しさ、見つける喜び

- ・ 興味関心の対象の広がり
（国旗から文化、自然などへ）

- ・ 自分が気付いた発見や、思いの表現
- ・ 知識の広がり
- ・ 想像する楽しさ
- ・ 異文化への関心と理解

『お茶熱いですから気をつけて』って言うのはどう？

課題への積極的な取り組み（「敬老の集い」での役割の達成）

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園保育室・遊戯室 ★時期：9月

事例：28

園の伝統行事の「敬老の集い」では、年長児全員がお客様のおもてなしをします。それぞれ役割（係）を決め、練習することになりました。

お茶を運ぶ係になった子どもたちは、「温かいお茶を運んでもらうからね。急がなくて大丈夫だよ」という担任の話真剣に聞いています。

レイ 「『はい、どうぞ』って、ゆっくりと言って渡そうかな」

ノゾミ 「先生、『お茶熱いですから気をつけてください』って言うのはどう？」

担任 「それはいい考えね。そんな素敵な言葉があるとお客様はとっても嬉しい気持ちになるよ」

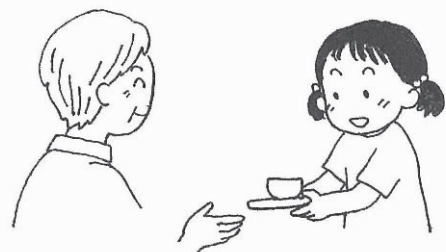
当日、子どもたちは急ぐように登園してきました。

（いよいよお客様が来園し、お茶を運ぶ直前）

ノゾミ（小さな声で）「先生、『お茶熱いから気をつけて飲んでください』って言うのはどう？」

担任 「うん。いい考えだね。きっとお客様は嬉しくなると思うよ」

ノゾミは慎重にお茶を運び、自分で考えたことを話しています。無事に運び終わってくると、安心した表情で担任に微笑み返してきました。お客様が帰った後、「あー、疲れた」と言いながらも、担任に「とってもお客様が喜んでいらっしやっただよ」と言われ、満足そうに顔を見合わせて笑っていました。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図………

- ・「おもてなし」を通して、相手の気持ちを考えて取り組むことや、自分の発した言葉が相手にどう受け止められるかを実際の場で経験してほしい
- ・相手を思いやった気持ちと行動を承認することで、次の行動からも自信をもって取り組ませたい

- ・お客様をもてなす気持ち
- ・自分なりに相手のことを考える

- ・一言添えることで、相手が嬉しい気持ちになることを知る

- ・努力が認められた喜び
- ・自己有能感（役に立った喜び）

- ・達成感、充実感
- ※相手を思いやった気持ちと行動を相手からきちんと承認される



次からも自信をもって行動できる

…じゃあ誰のハンカチなの

視野を広げて再考する（結果から前提条件を修正する）

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園保育室 ★時期：9月中旬

事例：29

アリサは保育室の前の廊下にハンカチが落ちていたので、それを拾い上げると、「これは誰のですか？」とクラスみんなに声をかけました。しかし、何度聞いても誰も返事をしません。落とし主が見つからずに困ったアリサは、仲よしのカズエに相談しました。

アリサ 「どうしよう。誰も自分のって言わないよ」

カズエ 「ハンカチ、あたしに貸して」

カズエはアリサからハンカチを受け取ると、クラスの人ひとりに「誰の？」と聞いて歩き始めました。結局、クラス中の誰も落とし主ではありませんでした。

カズエ 「誰も落としていないみたい」

アリサ 「でも変だよ。じゃあ、誰のハンカチなの」

カズエ 「…う～ん。あつ、ひよっとしたら…」

カズエとアリサはハンカチを持って、今度は隣のクラスに落とし主がいなかったか聞きに行きました。



4歳児のクラスの子のもので、2人は喜ばれました。



気づきや経験した事柄

- ・落とし物は落とし主に戻りたい
- ・思いやり
- ・物を大切にすること
- ・落とし主に戻す義務感
- ・解決のための試行と工夫
- ①一番効率的と思われる方法の試み
→全員に声をかける

- ②次に確実な方法に変換
→個別に訊ねて確認する

- ③別のクラスでの確認
（「自分のクラスの中に落とし主がいる」という最初の仮説を変更する）

先生、ミサト、なわとび上手になったよ

プロセスの大切さ

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園園庭 ★時期：10月

事例：30

ミサトの学級では、今、なわとびがちょっとしたブームになっています。始めは全然跳べなかったミサトも、お友だちと毎日練習をするうちに、少しずつ跳べる回数が増えて、それが嬉しくてたまりません。

ミサト「先生、ミサト、なわとび上手になったよ」

担任「ホント？じゃあ、先生に見せて」

ミサト「うん。いいよ。そこでちゃんと数えていてね」

担任「1、2、3、4、5、…」

ミサトは張り切って跳び始めたものの、5回で失敗してしまいました。

担任「あっ～惜しい。足が引っかけちゃったね」

ミサト「…」（無言）

担任「すごいね。もう5回も続けて跳べるんだね」

ミサト「うん…、でも、ホントはもっと跳べるんだよ」

担任「この間まで1回しか跳べなかったでしょ？」

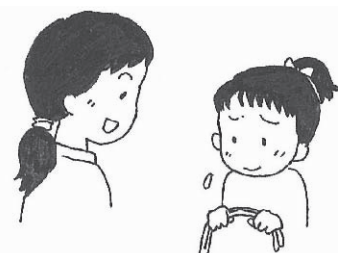
ミサト「うん。今は違うけど」

担任「それってすごいよね。どんどん上手くなっているってことでしょ」

ミサト「うん！」

担任「じゃあ、もう1回。今度は10回まで挑戦してみようか？」

ミサト「うん。今度はできると思うから、見ていてね、先生」



気づきや経験した事柄

・担任の承認への欲求

◆教師の意図……………
子どもの努力をきちんと受け止めた対応をしたい。努力を深め、一層意欲を高めたい。

・失敗の結果だけで評価しない大切さ

・頑張ったことの認め

・成果を示せなかった悔しさの共感

◆教師の意図……………
・結果もだが、努力している過程が大事なことを理解してほしい
・子どものレベルに合った次の目標の提示

・プロセスの大切さへの気づき
・積極的な挑戦心の誘発

この位で遊んだほうがいいよ。間に合わなくなるもん

1日の生活の流れの理解 時間にかかわる感覚

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園遊戯室 ★時期：10月

事例：31

保育室のホワイトボードには、幼児たちの今日の予定と集合時間が書いてあり、登園したら、自分の予定や集合時間を確認してから遊び始めるのが学級のルール（約束）になっていました。ある日、3人の男児が一緒に大型の積み木で遊ぶことになりました。

アキヒロ「積み木で2階建ての基地を作ろうよ」

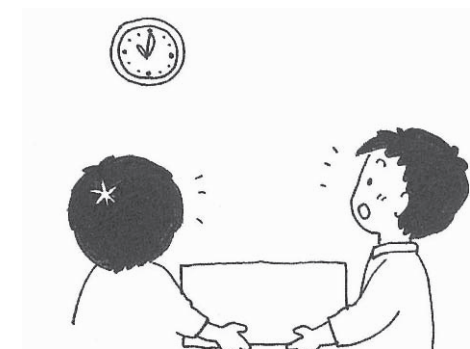
ヒロト「大きいのがいいな」

ジュンペイ「いいよ」

ところが、作っている途中で、ジュンペイが何かに気付いて、声をあげました。

ジュンペイ「あっ！待って。あの時計の長い針が6になったら集合時間でしょ？今が12だから片付ける時間も入れると、あっちまで広げないで、この位で遊んだ方がいいよ。間に合わなくなるもん」

ヒロトとアキヒロも時計を見て、うなずきました。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図……………
1日の流れを意識しながら、自分たちの遊びを展開してほしい

・2階建てという具体的な目的と、実現できる力の実感

・遊びの見通しと所要時間の理解
・時間の長さの理解

・自分たちの行動に要する大まかな時間の把握

・友達の提案の受け入れ（了解、了承し合える仲間関係）

あれ！真っ黒。どうして？

機器の特性の理解

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園保育室 ★時期：10月上旬

事例：32

下旬に行われる誕生会でOHPを使ったお話をすることになりました。サトシ、トオル、タカシ、リュウタ、シュンスケの5人はロケットに乗って宇宙探検をする話をすることにしました。担任に黒の画用紙をもらい、クレヨンでロケットや月、地球などいろいろな衛星や星を描き、勇んでOHPの投影台にのせると、スクリーンは真っ暗になりました。

サトシ 「あれ！真っ黒。どうして？」

シュンスケ 「ほんとだ！どうしてだ？」

トオル 「地球だってちゃんと青く描いたのに」

5人が裏返したり向きを変えたりしながら考えているところに担任が来て、

担任 「何か困っているみたいね」

園児たち 「うん、せっかく描いたのに真っ暗なの」

担任 「そうか、どうしてだろうね。ずっと前、人間を描いた時、目や口はどうしたか覚えてる？」

園児たち 「そうか！切り抜いて穴あけたんだ」

5人は映したいところをあげ始めました。担任はセロファン紙やカラーシートを提示し、切り抜いた部分に色が出るように援助しました。

月や地球などがそれぞれの色に輝いて映り、5人は大喜びし、他の幼児たちにもOHPの特性が伝わりました。



気づきや経験した事柄

・目的の共有

◆教師の意図……………
暗いから黒の画用紙と言ってきたが、自分たちでOHPの特性に気付いてほしいのでその通りにする

・宇宙への興味関心
・宇宙は暗いという理解

・予想と異なる現象との出会い

◆教師の意図……………
経験の想起を図ることで、自分たちで気付いてほしい

・経験からの気づき

◆教師の意図……………
OHPならではの経験をしてほしい

・OHPの特性の理解
・光を通す美しさへの感動

アキちゃんは速いからアキちゃんはどう？

友達の良さの発見 特性の理解

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園園庭 ★時期：10月上旬

事例：33

運動会が近づき、担任が今日は11時からみんなでリレーをすることを伝えました。10時20分ころになるとそれぞれが遊んでいたものを片付け、10時半を過ぎると、赤白両チームとも仲間を呼び集めて走る順番の相談を始めました。(1チーム15人ずつなので、15番までのゼッケンを用意してあります。)

担任が赤チームに1人欠席があることを伝え、自分たちでも分かっているようで、誰が2回走るのがよいかをまず相談しています。

白チームはトップとアンカーを決めていますが、なかなか決まりません。リレーはトップとアンカーが決め手ということは、全体に浸透しているようです。

赤チームは、ソウタが2回走ることになり、1回目は4番目に走り、もう一度は11番目になり、まず11番のゼッケンを付けその上に4番を重ねて付けました。他の幼児もそれぞれ自分で番号を選んで付け並びます。担任が確認し、「11番がないね」と言うと、「ソウタ君が2回走るから」と全員が理解していました。

赤チームのトップはクミに決まったのですがアンカーが決まりません。昨日は誰、その前は誰と言っていたが、ヤヨイが「そういえば、アキちゃんの時勝ったよ。アキちゃん速いからアキちゃんはどう？」と提案すると、「そうだ、それでいい」「アキちゃん、お願い、頑張つてね」と全員一致で決まりました。

担任は「みんな友達のことがよく見ているんだね。仲間の応援もしているし。この勝負は楽しみだね」と自分たちで決めたことを認め、期待を伝えました。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図……………
・時間を伝えることで、自分たちで生活の流れを考えてほしい
・順番を決めたり自分が何番目に走るのか、チームのメンバーの認識など意識をもって取り組んでほしいから、ゼッケンを出す

・時間と活動の関係の理解と行動
・一人ひとりの意識の育ち
・活動への期待と意気込み
・人数合わせのための方法の理解

・活動の楽しさと特性の理解

・友達の特性の理解
・2回走るとの間隔の取り方
・2回分のゼッケンの操作

・欠番の理由の理解

・経験からの提案
・提案内容の理解、納得、了解
・チームとしての一体感

◆教師の意図……………
自分たちで課題解決ができたことと成長を伝えたい

先生と一緒に跳べるんだけどな

できないことへの挑戦・努力

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園園庭 *時期：10月下旬

事例：34

サトルはなわとびが跳べるようになりたくて何度も跳んでみるのですが、上手くタイミングがとれずに跳べません。担任に「1、2、3…」と掛け声をかけてもらいながら、みんなで跳ぶとできるのですが、1人だとできません。30回以上も跳べる他の子がうらやましくてしかたがありません。

サトル「先生と一緒に跳べるんだけどな」

担任「先生ともう一度してみる？」

サトル「うん」

その後も毎日登園すると園庭の隅のほうでなわとびの練習をしました。上手くできないのはリズムとタイミングの取り方が悪いからだと思い担任は、縄を使わずに2人で手をつないで同じ場で同じリズムで上下の連続跳びをしたり、2人で縄だけを回したり、回っている縄の通り抜けをしたりなどもしてみました。そして数日後、

担任「もう、1人でできると思うよ。やっぴらん」

サトル「できた！5回跳べた！成功！」

担任「数えてあげるね」

サトル「今度は10回も跳べたよ！」

大喜びのサトルは、友だちの前で跳んで見せて、みんなにほめられて嬉しそうでした。それからは、友だちが跳べる30回を目指して、自分で数えながら毎日跳ぶ練習をしています。

気づきや経験した事柄

- ・上手くできないもどかしさ
- ・できる友だちをうらやむ気持ち

◆教師の意図

- ・目的を達成させてあげたい
- ・何とか努力が報われるように支援したい

◆教師の意図

課題の解決のためのアドバイス

- ・課題解決の具体的な方法の獲得
- ・目標に向かう努力
- ・担任と一緒に活動の楽しさ

- ・担任の励ましと期待
- ・努力の結果の確認
- ・成功の喜び
(努力が報われる実感)

- ・友だちの賞賛
- ・運動能力の伸長
- ・努力は報われるものという理解
(確信)

そうか！もしかしてお風呂の時とおんなじ？

水位と物体の関係の気づき

*年齢：5歳児 *場面：幼稚園保育室 *時期：11月上旬

事例：35

降園の時、担任はイソップ物語の「カラスと水差し」の絵本を読みました。

<話の内容>歌うのが好きなカラスは歌いすぎてのどが渇き、水が飲みたくなりました。しかし、近くに川や湖などの水場がありません。水を探して飛んで行くと水の入った水差しがありました。ところが、水差しの口が狭いので水が半分より下のほうにしか入っていないのでくちばしが届きません。しばらく考えたカラスは近くに落ちている石ころを何個も水差しの中に入れて始めました。カラスは水を飲むことができました。

幼児「どうして石をたくさん入れたら水が飲めたのかな？」

担任「どうしてだろうね。不思議だね」

幼児「分かった！石がぬれたら舐めればいい！」

担任「そうか。でも、石が出せるかな？」

幼児「うーん。だめだよね…」(首をひねっている)

タイチ「分かった！もしかして…。そうだ！お風呂の時とおんなじ？」

他の幼児「そういえば、ぼくもあった」

担任「ピンポン、ピンポン。よく分かったね」

タイチ「うん。だってさ、僕だけの時はこぼれないけどお父さんやお母さんと一緒に入るとお湯がこぼれるもん」

担任「そうだね。でもすごい！タイチくんよく気が付いたね」

タイチは担任にほめられて嬉しそうでした。次の日、数人の幼児が自分たちで絵本を見始め、カラスが石を入れ始めたところからは、ゆっくりめくっていました。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図

- ・知恵を働かすことの大切さ
- ・水の性質に気付いてほしい

- ・自分の考えとの不条理を感じる

- ・自分なりの考え

◆教師の意図

誰かが気付いてほしい

- ・可能性の推察
- ・経験した現象との結びつけ

- ・水に物を入れると溢れるという原理の気づきと理解

◆教師の意図

幼児の気づきの受け入れと十分な承認、賞賛

- ・自分の発見の確認と有実感の実感

事例：36

幼児たちは「綱引き」をしたくなり、綱を用意して、赤と白のチームに分かれたところで、赤チームのマサキが、白チームのヤスマサに声をかけました。

マサキ 「そっちのチームは何人いるの？」

ヤスマサ 「8人。そっちのチームは？」

マサキ 「7人。こっちは1人少ないから損だよ。

そっちは誰かひとり応援する人になって」

ヤスマサ 「そっちに誰かもう1人入れればいいじゃん」

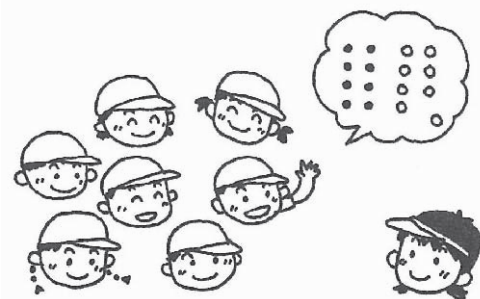
マサキ 「でも誰もいないよ」

(誰も抜けたがらないので、みんなが困っていると)

タカマサ 「そうだ、先生に入ってもらおうよ！」

幼児たち 「それがいい」

言い出したタカマサが先生を呼びに行き、1人少ない赤チームに入ってもらいました。両チームが無事、同人数になったことで全員が納得し、やっと「綱引き」が始まりました。



気づきや経験した事柄

- ・数を数える
- ・数の比較（人数の違いの理解）
- ・1対1対応の概念
- ・意見を出し合う
- ・調整の必要性

- ・解決のための方法を思いつく
- ・友だち（他者）の考えを理解し、認める

- ・人数の差の不合理には気付く
- ※人数が合えば、力や質の違い（大人と子どもの力の差）までは問題点としていない

事例：37

クラス全員で鬼ごっこをすることにし、「子ぶやし鬼」のルールを説明します。

担任 「今日の鬼ごっこは少し難しいです」

幼児 「えっ！どんなの？楽しみ！」

ルールは、鬼は始め1人で追いかけて、捕まったらその人と手をつなぐ。2人で捕まっていなかった人を追いかけて、捕まったらまた手をつなぐ。4人になったら2人ずつに分かれて、全員捕まったら終わりになります。

サヤカが初め鬼になり、タエ、カオルの順に捕まえました。次にケンジを捕まえ4人になりました。

サヤカ 「4人になったからそこで手を離して」

カオル 「えっ！どうして」

タエ 「だって4人になったじゃない」

サヤカ 「4人になったら2人と2人になるんだよ」

カオル 「あ、そうだった。じゃあ、あたしとケンくんになればいい？」

ケンジ 「カオルちゃん、早く行こう」

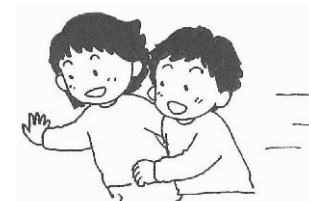
その後、何組かで同じような状況が見られましたが、1回戦の終わるころには全員理解できました。

カオル 「この鬼ごっこおもしろいね。初めちょっと難しかったけど」

サヤカ 「うん、人間の分けっこだね。算数の勉強みたい」

幼児たち 「先生、もう1回やりたい！」

その後、しばらくの間繰り返され、分かれるのも早くなりスムーズに展開されていました。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図

- ・数に興味をもってほしい
- ・数の集合と分解についても知ってほしい

- ・教師の話の理解と実践

- ・相手の理解が得られる説明（納得）

- ・きっかけによる想起と解決策

- ・繰り返しの効果
- ・遊びのおもしろさと特性の理解

- ・数の集合と分解の理解

- ・具体的な数の操作の体験

1つ残ったから最後は6個にしよう

日常生活の中にある危険の防止 部屋をきちんと片付ける習慣

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園遊戯室 ★時期：12月

事例：38

遊戯室で絵を描き終わり、自分の使ったイスを片付けようとしていたアリサは、部屋の中のイスが高く積み上げられているのを見て、「危ないね」と言います。その言葉を聞いたカズエとショウコも、「本当だ。危ないね」と同意し、3人でイスを片付けることにしました。

全部で80脚以上はありそうなイスの山を、普段、保育室でしているように、5脚ずつ重ねて、きれいに並べて片付けていきます。ところが、5脚ずつ重ねていったところ、最後にイスが1脚残ってしまいました。カズエが「もう一度、数えよう」と言い、3人は重ねたイスをもう一度数えて、ちゃんと5脚ずつになっているか確認しました。

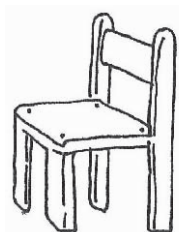
カズエ 「やっぱり、全部5つずつあったね」

ショウコ 「…どうする？」

アリサ 「最後は6個にしよう」

ショウコ 「うん、そうしよう」

アリサは最後の組だけは5脚ではなく、6脚のイスで1組にすると、「先生、1つ残ったから、最後は6個にしたよ」と担任に伝えにきました。



気づきや経験した事柄

- ・安全性（危険性）への感性
- ・自発的な「善意」の行動
- ・社会性の目覚め
- ※「気が付いた以上、放置しない」という（幼児なりの）義務感

- ・生活体験から得た知恵の活用
- 大きい数（80以上）は、分割・整理して対応
- ・5でまとめる必要性の理解と活用
- ・予想通りにいかないときの、解決のための思考

- ・自分の考えを相手に伝える
- ・友だちの考えを認める

- ・臨機応変の対応
- ・自分の行動の連絡・報告

歌いながら鳴らしたら気持ちがそろうかな？

協調性の涵養 音がそろう心地よさ

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園保育室 ★時期：12月

事例：39

ハンドベルに興味をもった幼児たちが、そばにあった「きらきら星」の楽譜を見ながら音を鳴らしています。ユウヤは「こんなの簡単だよ」と得意げですが、ときどきヨシマサが忘れていたり、分からずに音を鳴らさなかったりすると、「ちゃんと鳴らしてよ！」「間違っなよ！」などと文句を言います。

担任がその様子を見て、「きれいな音色ね。何か1曲聴かせて」と言うと、子どもたちは得意げに「きらきら星」を演奏し始めました。

ところが、ユウヤの鳴らし方が速く、4人の音がばらばらで、曲にはなりません。途中からユウヤは他の子に「もっと速く」「遅いよ」と言い出しました。

担任 「みんなの気持ちがそろうともっと素敵な音になるはずだよ」

ユウヤ 「歌いながら鳴らしたら気持ちがそろうかな…。どのくらいの速さで歌えばいいのかな…」

やがて歌の歌詞を声に出しながら、ハンドベルを鳴らし始めると、今度はフレーズがつながり、幼児たちの耳にも「きらきら星」の曲に聞こえました。4人は「おー、すごい」と口々に叫び、ユウヤも「できたー」と嬉しそうです。



気づきや経験した事柄

- ・楽器や音階への興味
- ・ハンドベルの音色の美しさ
- ・楽譜の字を読む（文字への関心）
- ・自己有能感から生まれる他者の否定

◆教師の意図……………
相手の音を聴きながら、自分の音を鳴らすことで、曲として成立することに気付いてほしい
(気持ちを合わせることの大切さ)

- ・協調性の必要感
- ・協調する方法の工夫、習得

- ・音が合う心地よさ
- ※協調して成し遂げることの喜び

やっと冬が来たんじゃない

自然現象の体験（竜巻、落ち葉、季節感） 季節の変化

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園園庭 ★時期：12月

事例：40

北風の吹く寒い日。風で落ち葉が舞い上がる様子を見ながら、コウキとゲンタが話をしています。

コウキ「あっ、竜巻だよ」

ゲンタ「どうしてあの木の下だけなるのかな？」

別の場所で落ち葉を集めてきたアンナとアイコはそれを担任に見せに来ました。

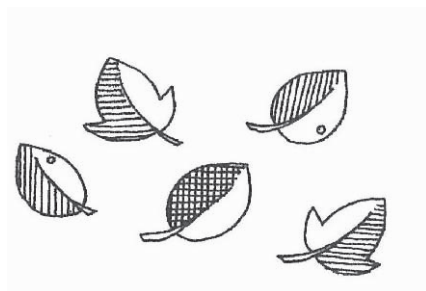
アンナ「とてもきれいな色の葉っぱがあったよ」

アイコ「赤色で、裏は黄色の葉っぱなの」

担任「ホントね。きれいな色ね」

アンナ「冬になると、葉っぱもお化粧するんだね」

その後、お弁当を食べながらみんなで竜巻のことや、葉っぱの色のことを話題にしました。すると、ミキが「やっと冬が来たんじゃない」と言いました。



気づきや経験した事柄

- ・1ヶ所だけに風がまわる不思議

◆教師の意図
自然現象を正しく（難しく）説明し、理解させるより、子どもと一緒に不思議さを楽しむ

- ・落ち葉の色の美しさへの感動
- ・一緒に感動を共有する
- ・季節の変化への気づき

お母さんザリガニと同じ形だ！

生き物の観察 生命の誕生の喜び ザリガニの特性の理解

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園保育室 ★時期：2月

事例：41

クラスで飼育しているザリガニが産卵しました。お腹に卵をいっぱいつけたザリガニに、子どもたちはとても興味をもって、毎日、長い間、水槽をのぞいていました。

タイチ「（卵は）どうやってくっついているのかな？」

ヨウコ「あの中にザリガニの赤ちゃんがいるんだね」

タイチ「あれ、だんだん卵の形が変わってきたよ」

ある日、数匹が孵化し、水槽の中で跳ねていました。

タイチ「うわー！赤ちゃんになったんだね」

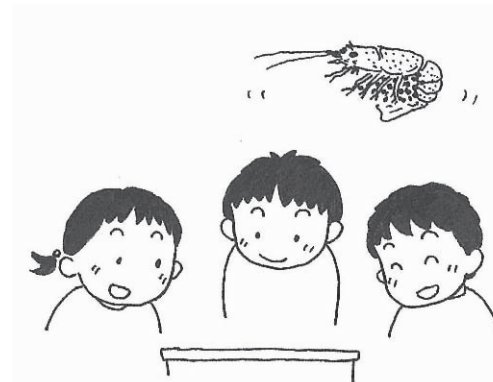
ヨウコ「すごく小さいね」

タイチ「でも、お母さんザリガニと同じ形だ」

ヨウコ「忘れずに、ちゃんとエサをあげないとね」

タイチ「そうしたら、きっと大きくなるよね」

その後もザリガニはどんどん孵化し、水槽はにぎやかになりました。子どもたちは金魚のエサや乾燥イトミミズなどをあげながら、小さなザリガニがエサを食べる様子を楽しそうに見ていました。



気づきや経験した事柄

- ・生き物への興味関心
- ・生き物の生態の観察
- ・実物（本物）を間近に見る

- ・特徴の理解

- ・自分で気付いたことを発言する

- ・生物（命）の誕生の喜び

- ・成体と幼体の形態の比較

- ・生き物の成長への期待と予測

今の上手だったよ

自分の役割の意識・責任感 アンサンブルの楽しさ 仲間への思いやり

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園保育室 ★時期：2月

事例：42

5歳児の「はと組」では楽しみながら発表会の合奏ができるよう、いろいろな楽器を遊びのコーナーに出しました。幼児たちはすぐに興味を示し、それぞれ楽器を手にはして、いろいろ音を出して楽しみ始めます。

担任が学級で合奏しようと考えている曲をかけ、カスタネットを鳴らすと、幼児たちは簡単なリズムをすぐに覚え、同じように鳴らします。次にタンバリンを鳴らしてみると、これもすぐに覚えました。やがて、興味をもった幼児たちが集まり、楽器を分担して、合奏をする姿が連日のように見られました。木琴やハンドベルの音程が違うと、「なんか変だよ」「嫌な音がする」などと言い、人数が足りないとい人で複数の種類の楽器を受け持つ子もいました。

発表会で木琴担当になったアツシは自分で毎日練習していましたが、なかなか上手いきません。同じ木琴担当のマサルとヤエと一緒に打ちながら、「こうだよ」とやって見せたり、「今の上手だったよ」と励ましたりしていました。

当日は少し緊張しての合奏でしたが、たくさんの拍手をもらい、どの幼児も嬉しさいっぱいの様子でした。

「ちょっと間違っちゃった」というアツシも、役割を果たした満足感を味わえたようでした。



気づきや経験した事柄

◆教師の意図

子ども自身の興味関心を優先する
(複数の選択肢から自分で選ぶ)

- ・見たり聞いたりして再現する力
- ・リズムにのる楽しさ
- ・視覚、聴覚から情報を取り入れ、その差異を判断する (聴き分ける)
- ・自分の役割を果たすための努力
- ・自発的に自習する姿勢 (協働性)
- ・自分の目標をもって取り組む (挑戦する)
- ・自分ができることを友だちに教えてサポートする
- ・達成感、満足感の実感 (体験)

どっちも凍らない。なんで？

考えの実験 (予測と結果) 条件によって結果が異なることの理解

★年齢：5歳児 ★場面：幼稚園園庭 ★時期：2月上旬

事例：43

朝、ヒカルが登園する途中の公園の水溜りが凍っていたと言って薄い氷を持って登園してきました。みんなで触っては「冷たいね」と言い合っていましたが、ついに溶けてしまいました。自分たちも凍らせてみたいということになりました。「寒くなければいけないこと」や「水が必要なこと」は分かっているのですが、まず、担任に相談します。担任は「気温が低くないとできないこと」「日陰でなければいけないこと」の理解の確認をしました。天気予報で調べた結果、「今晚は冷え込みが厳しい」とのことだったので実験することになりました。

- ・サユリたちはプリンのカップとピンに水を入れて北側の風の通り抜けている土の上に直接置きました。
 - ・アキヒサたちは真水を入れたピンと不透明絵の具で作った色水入りのピンをサユリたちのとなりに並べました。
 - ・カナコたちはサユリたちとまったく同じものを用意して北側のテラスの上に置きました。
- 翌朝、登園すると早速見に行きました。
- ・サユリたち 「ピンは凍ったけどカップは凍っていない。どうしてだろう」
 - ・アキヒサたち 「色水はだめだった。不思議」
 - ・カナコたち 「どっちも凍らない。なんで？」

担任はそれぞれがいろいろ予想し工夫して置いたことを認め、できなかったことの残念さやつまらなさを受け止めた上で、プラスチックとガラスでは冷え方が違うこと、真水と色水でも違うこと、特に不透明絵の具は凍らないこと、そして、地面に直接置いたときとテラスでは冷え方が異なることなどを説明しました。

2回目は全員のものが凍りました。



気づきや経験した事柄

- ・寒さの体感
- ・氷の性質
- ・興味の追究

- ・現象が起きる条件の概況理解

◆教師の意図

冬ならではの経験をしてほしい。折角やる気になっているので実現させたい。失敗もいかなと思いい準備については見守る

- ・凍ることの理解と期待
- ・どんな水でも凍るという予測
- ・色つきの氷を作るという目当て
- ・地面より高いほうがよいという意識
- ・季節感
- ・成功と失敗の体験
- ・期待と異なる結果との出会い
- ・挫折の体験
- ・同じ気象状況でも場所によって温度などの条件差が生じることとの出会い

◆教師の意図

- ・氷の特性と現象を理解してほしい
- ・失敗を次に生かしてほしい

- ・自然現象の不思議さと理解

＊ 著者のご紹介 ＊



磯部 頼子 (いそべ よりこ)

東京都足立区立大谷田幼稚園長、
全国国公立幼稚園長会会長、
東京都公立幼稚園長会会長、
足立区立幼稚園長会会長、
全国国公立幼稚園PTA連絡協議会副会長を歴任。
現在、ベネッセ次世代育成研究所顧問として
幼児教育研究に携わっている。

＊ 協力者 ＊

- 中山 和佳子 (台東区立清島幼稚園長)
- 稲留 恭子 (中央区立有馬幼稚園教諭)
- 野崎 美幸 (文京区立小日向台町幼稚園教諭)
- 大澤 洋美 (品川区立二葉幼稚園教諭)
- 高橋 尚美 (港区立芝浦幼稚園教諭)

※所属、書ききは平成19年現在

＊ イラスト ＊

- 高橋 尚美 (港区立芝浦幼稚園教諭)

発行所

(株) ベネッセコーポレーション
ベネッセ次世代育成研究所

編集・制作

ベネッセ次世代育成研究所
〒101-8685 千代田区神田神保町1-105神保町三井ビルディング15階
TEL : 03-3295-0294 FAX : 03-3518-2553

編集スタッフ

真田 美恵子 (ベネッセ次世代育成研究所)

本誌デザイン

古関 敦子 (スフィア)

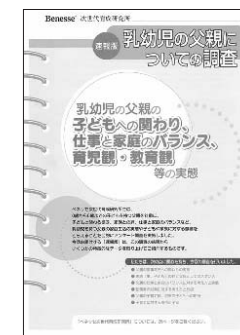
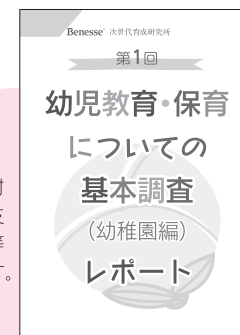
無断転載を禁じます。
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

© 株式会社ベネッセコーポレーション

Benesse®

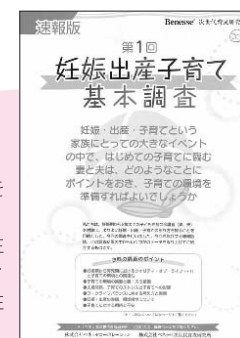
＊ ベネッセ次世代育成研究所の発刊物のご紹介 ＊

全国の国公立幼稚園の園長・副園長(教頭)・主任の先生を対象に、幼稚園における子育て支援活動や教育活動、教育環境等の実態を調査したレポートです。(2008年3月完成予定)
※デザインは変わることがあります。



0歳から6歳までの子どもを持つ父親を対象に、子どもと関わる様子、家族との絆、仕事と家庭のバランスなど、乳幼児を持つ父親の家庭生活の実態や子どもや家族に対する意識をとらえた調査の速報版です。

妊娠期から2歳までの子どもを持つ夫婦を対象に、妊娠・出産・子育ての実態把握や、子育て生活と夫婦のQOL(クオリティ・オブ・ライフ)との関連性をとらえた調査の速報版です。



乳幼児のテレビ・ビデオ視聴の実態に関する調査や、上手なメディアの使い方や親子コミュニケーションの取り入れ方などに関する研究をまとめた冊子です。

調査速報版の無料ダウンロード、さらに詳細な調査結果を掲載した報告書の購入申込、ベネッセ次世代育成研究所の調査研究活動の最新情報については、当研究所のHPをご覧ください。

<http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>

(各種検索エンジンで「ベネッセ次世代育成研究所」と検索してください)

幼児の遊びにみられる学びの芽

発行日：2007年12月1日 発行人：岡田晴奈 編集人：後藤恵子
発行所：株式会社ベネッセコーポレーション
企画・製作：ベネッセ次世代育成研究所

〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング15階
(株)ベネッセコーポレーション ベネッセ次世代育成研究所
TEL:03-3295-0294(受付時間10:00~17:00 土日・祝日・12:00~13:00を除く)



幼児の体験と幼稚園教育要領の内容とのつながり

幼稚園教育要領の「5つの領域」と内容（一部のみ）

4歳児

事例：16
赤はあっちにあるよ、さがしてくれば（3月）

- ・自分の気持ちの整理
- ・情報提供
- ・自分の欲求の主張

事例：1
ダンゴムシはどこにいるの？（5月）

- ・ムシの特性の理解
- ・情報収集力

事例：13
階段でさ、こうなるんだよね（12月）

- ・空間を埋める方法の理解

事例：9
同じもの入れたのに、どうして音が違うの？（10月）

- ・材質と量の違い
- ・作ったもので遊ぶ楽しさ

事例：10
おしゃれ屋さんですよ、いらっしゃい（10月）

- ・売り買いの経験
- ・数の認識

事例：14
氷の家？フーって吹けないな・・・（1月）

- ・状況に応じた発想
- ・表現の楽しさ、おもしろさ

健康

- (1)先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。
- (2)いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
- (3)進んで戸外で遊ぶ。
- (4)様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。

人間関係

- (1)先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
- (2)自分で考え、自分で行動する。
- (3)自分でできることは自分でする。
- (4)友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- (5)自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
- (6)友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
- (7)友達と一緒に物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
- (8)よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
- (9)友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ。
- (10)友達と楽しく生活する中でできまりの大切さに気付き、守ろうとする。
- (11)共同の遊具や用具を大切に、みんなで使う。

環境

- (1)自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2)生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3)季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4)自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
- (5)身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
- (6)身近な物を大切にする。
- (7)身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- (8)日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
- (9)日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
- (10)生活に関係の深い情報や施設などに関心をもつ。

言葉

- (1)先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。
- (2)したこと、見たこと、聞いたこと、感じたことなどを自分なりに言葉で表現する。
- (3)したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
- (4)人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- (5)生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- (6)親しみをもって日常のあいさつをする。
- (7)生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- (8)いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- (9)絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。
- (10)日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

表現

- (1)生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、楽しんだりする。
- (2)生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3)様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。
- (5)いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6)音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。
- (7)かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりする。
- (8)自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう。

5歳児

事例：7
そうだ、切ればいいんだよ（5月）

- ・課題解決の必要性
- ・差の気付き
- ・納得と安心感

事例：12
年長だからひとり20回にしようよ（6月）

- ・ルールを守る必要性和大切さ
- ・意見や考えを伝える（判断）

事例：24
不思議！だんだん染み込んでいく（7月）

- ・色水が浸透していく不思議
- ・観察力
- ・担任と同じ体験の確認

事例：19
学校の勉強したみたい（6月）

- ・コミュニケーション
- ・収穫の楽しさ
- ・数の集合の理解

事例：21
たんけんごっこしようよ（7月）

- ・想像力を駆使する楽しさ
- ・イメージの共有
- ・イメージの実現

事例：28
「お茶熱いですから、気をつけて」っていうのはどう？（9月）

- ・課題への積極的な取り組み
- ・達成感 充実感

事例：40
やっと冬が来たんじゃない（12月）

- ・自然現象の体験
- ・季節の変化

事例：42
今の上手だったよ（2月）

- ・自分の役割の意識
- ・リズムに乗る楽しさ